

550

57

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





吉野山  
の  
御朱印  
車  
名

大正  
15. 6. 9  
購求



神楽坂  
十の月

はしがり

大正十二年九月一日の大地震と大火事に我著書一切の紙型は全滅に歸して仕舞つて、おまけに都下の印刷工場また殆ど灰燼となり殆ど能力を失ふた中から復興したのが此浪六全集で、こゝに漸く再び世に出るといふ事は、著者として死んだ子の蘇生した親心から、更に多少の筆を加へて再生の愛兒に着物を着かへさせた點もある。

大正十三年の秋

吉田雄藏

其一

うまれ故郷の鎮守の森の社前に力足踏んで、學もし成らずんば死すとも歸らずと誓ひ  
 し奴が、三年五年の後に楊枝一本を削る業もならず、そのまゝ都の中央に飢ゑて死な  
 ぬを幸ひ生きてノコリ、歸りながら、曾ては自己が身の丈にも及ばざりし春門の桃の  
 木さへ今は屋の棟に聳えし鈴生の實を仰いで恥づかしくとも思はず、むしやく取つて  
 喰うて平氣に嘯八百の出放題、さアこれからが代議士に選ばるゝ地盤計畫などと吐す  
 もあり、また里外れの橋の欄干を叩いて錦繡を身に纏はずんば再び渡らずと誓ひし奴  
 が、どこの下宿屋を喰ひ遁けの果か腐つた蝦茶袴と野合夫婦の編笠揃ひ金巾染の伊達  
 衣裳、連彈の月琴に身の恥を掻き鳴らして足拍子を取りながら、さゝほうけエと唄うて

歸るに至っては論にも齒にもかゝらず、たゞ呆れて恐るゝの外なし、よし斯くまで落ちて流れて歸らずとも、女義太夫の席に下足札を叩いて所謂どうする連、縁日の人出に群をなして押し廻る美人の探検隊、迎も中らぬ揚弓の的に學資の矢種を射盡すもの、及ぶかぎりの知合を欺して素性も知れぬ端た女郎に欺さるゝもの、書を賣つて白粉臭き女學生に交はるもの、衣を典して煙草屋の看板娘に親しむもの、ろくでもない下等の料理屋に名を知らるゝ奴、駄小説の貸本屋に常得意とせらるゝ奴、男地獄の艶沙汰を羨んで頻りに南瓜面を磨く奴、落語家の口調を學んで的なしに色男を氣取る奴、其他もろくの墮落書生を數へ來れば、年々の統計表に凡そ二千萬圓といふ學資の七八分は世の中の薄闇より牙を鳴らして覘ふ惡魔の餌となり、わづかに残る二三分も半は身賣算段の卒業證書を購ふ代價に支拂はれつゝ、その學びしところは自己を通じて社會必要の名器となるもの果して幾何かある、さればとて今日の苦學生

また苦學の成功いよく薄くして、身を勞し學を修めんとするの志は憫れむべきも、奈何せん學者も勞働者も衣食の道に溢れて切賣安賣の世の中に、元來不運の一青年が限りある勞力を割き限りある時間を偷んで際限なき業を成さんとするもの、氣は逸れど足は進まず日は暮れて道は遠きの諺、動もすれば苦學十年こゝに徒勞十年の結果となりて、勞は學に代へんより金に代へて國に持ち歸らざりしを憾むの歎あり、まして苦學生の一轉せし墮落生は、家を逐はれし繼子の如く耳目の觸るゝところは我ための敵とし、飼主なき狂犬の如く人の影さへ見れば忽ち飛び出して喰ひ付かんとす、破れ袴の一文壯士、三百代言の手下人足、半破戸の強請談判、丸裸の喧嘩腰、詐偽的の募集金、居坐りの恐喝罪、無錢遊興、無理賣買、およそ罪の憎むべき割合に刑の輕きを知つて犯すものゝ十中八九、皆これ多少の文字ありて一度は何れか校舎の門を潜りし身の果とぞいふ、

學資あるものも學資なきものも通じて天下の書生その十分の六七は有害無用の徒となり、わづかに残る三四分が卒業證書を振り廻して衣食の道に嚙り付き、さらに社會必要の材となるべきもの萬人中に只一人ありやなしやと思へば、文物の淵源たる第一の首府は身を立つるよりも身を亡ほすべき魔力の集合點にして、居家處世の法は寧ろ文盲の阿爺に講ぜらるゝの結果、竟に學は金のために壓せられ才は愚のために笑はれ校舎の俊秀は風塵の凡俗に使役せられて、あますところは何の效ぞ、あれも學問なければ今少しは役に立つ奴といはれながら、これを事實に打消すほどの力ありや、道理に合はぬ不道理に踏まれて天下の書生ぐうの音もなし、されど有用の材は書生に求むるの外なく、社會の任また書生に要するの外なし、いづれの中にか英雄を訪はんとは古昔のこと、今はいづこの下宿屋より天下の器を出すべきか、

大分縣豊後國南海郡といふ十字までは、兎も角も今日文化の餘澤に潤うて小學校の生徒も知れど、偕その十字以下の地圖にも洩れし山また山の片田舎、年に二度の盆と正月の外は白き色の米といふものを知らず、そのまた奥には竹の筒へ白米を入れて大切の家が主人が九死一生の枕頭に振り動かし、嗚呼あの人も振米の音まで聞いて死んだからは現世に思ひ残す事はあるまいといふ、その因部の里に生れて猪猿を相手に生涯を送るべきものが、身に鏢一文の學資もなく前途の空に一人の友もなくして山河三百里の途を野に伏し山に寝ながら、日本一の大都會へ罷り出でて雲の如く集りし幾萬の書生中より頭角をあけんとするものあらば、氣を以て行ふ東洋悲歌の昔は知らず實を以て勝つべき人事一切資本的の今日、誰か其意氣を憫れんで其無謀を笑はざる、されどこゝに一人いまだ天下有用の器たらずと雖も吉田雄藏あり、吉田雄藏が巖根に埋め

し臍の緒を見返りつゝ、馴れし猪猿と交を絶ちて山を出でしは十四の春、國の都といふ佐伯の町の縁も情も薄き親類の端に奴僕ぬぼくの如く召し使はれながら、やうく夜學に通ひしは丸三年、おもへば我も不具ならぬ無事息災の男一疋と腕を叩いて志を立てしは十七の夏、その家を飛び出して山家生育の身は幸ひ雨にも風にも兎の毛の痕なく、あらたに巢を出でし隼の勢ひ雲を凌いで羽を伸せし函根の頂上、これはまた苦學十年の効なきを悟り半生の失敗歴史を荷うて故山に馳せ歸らんとする川上三吉に逢ひ、事實の上より理論の上より頻りに説いて諫められしが、たとひ古今の賢哲こゝに手を聯ねて遮るとも屈せぬ意氣軒昂に、さらばとて戰場より引返せる敗軍の古兵が今や駈け出でんとする初陣の若武者に槍一本を與へし體、貫ひし一葉の名刺が其時の生命となつて、竟に他日の吉田雄藏を成しぬ、

當時もし川上三吉の理論に伏し實例に制せられて函根の絶頂より引き返せば、因部の

里か佐伯の町かに吉田雄藏いかなるべき、當時もし川上三吉が同情の涙にくれし一葉の名刺なくんば、生馬の眼を抜くとは昔の江戸、さても今は石佛の腸を取つて啖ふ東京の中央に、そもく浮世の二枚腰なき山家生育の吉田雄藏いかなるべき、されば汐入村の月もる宿に雨さへ防ぎかねて苦學難行せし破れ巢の軒も、吉田雄藏の身に取つては金殿玉樓に入るの心地、まして倉橋幸藏の謹直にして嚴肅なる上田力の質朴にして潔白なる黒田健次の磊落にして横着なる、三人いづれも此一青年に何等かの消息を傳へし無言の師となりて、その間に致々たる歲月さらに長からずと雖も、いまだ方圓の器に従ふ水の如き性に亨けて得たるところは幾何ぞ、

しかも其後かの川上三吉が故山を出でて再び都門に來りしより、おもはぬ奇縁その身を濱町の戀婚にせらるゝと共に吉田雄藏また伴はれて其家に寄食し、漢英の一校舎に通ふこと二年、さらに學資を給せられて都下の私立中に隨一の名ある法律學校へ入り



し以來、日夜たゞ黽勉として學窓の外に脇目も觸らざりし證據は、この啞に似たる山出しの初心者が議論百出の才子才物を遙に飛び越えて、卒業の曉を見れば優等第一の首坐を占めぬ、

米を喰はぬ人間の住む因部の山奥より無一文に飛び出して、もし眼前に衣食の道を求むれば判事檢事辯護士の試験に保険付の男となりし上は、もはや兎も角も一の堂に上りしもの、されど烏なき里に歸つて大い蝙蝠となり、また徒らに都市住居の小康を願うて千態一様の業に従はん事、そもく我本意にあらざるのみか、無事の運に叶うて猶かつ車夫か工夫となるべき筈の我をして今日あらしめたる川上三吉その人に感謝の道は未だ遙なりと、奮勵一番さらに大成の志を立てつゝ其まゝ依然たる書生の境涯を保ちぬ、

吉田雄藏こゝに當年二十六、うまれし故郷の山を這ひ降りてより十二年、佐伯の町を飛び出してより九年、前後十四年の行路を顧みれば茫として夢の如く事實また今昔の感に堪へざるべし、されど其身の生れし境涯と其身の歩みし行路と其身の今日あるを思へば、またこれ一個の好運兒、果して前途なほ此まゝの好運兒たるべきか、今や人生の半途、茫として夢の如きは他日さらに多かるべく、今昔の感に堪へざるもの、猶いよく幾年の後にあるべし、

しかも浮世は千態萬狀の手段を以て人を弄び、人は千態萬狀の手段を以て浮世に對ひつゝ、その間に於ける運命の神は理論の外より襲ひ來つて更に一種の怪腕を揮はんとす、まして二十六の今日まで斯の如き好運兒は却つて浮世の魔力に靨はれ易く運命の怪腕に襲はるゝこと多し、

山間に生るゝものと、海邊に生るゝものと、都會に生るゝものと、これを成童以上に得たる境遇の感化より脱却して寒暖の點に合すれば、自然の性に於て歴々たる相違あるのみか、さらにこれを身體髮膚の組織に就いて見れば、たとひ境遇の變遷に伴はる強弱大小は争ふべからざる一定の統計表を示して、人間また一の風土産物たり、されば鶏犬の聲を聞いて人家あるを知るといふよりも、狼の糞を見て人間あるを知るといふべき豊後の國の山奥に生れし吉田雄藏は、果して其風土産物に叶ひし骨格と容貌を保てるか、當年こゝに二十六の曉を見れば、肉瘦せたれど骨太くして、脊は尋常人よりも高く五尺四寸餘、體量は外觀よりも重く十四貫目以上、首骨短く肩幅聳え胸圍廣くして腰の張り出でたる體いかにも都人士の系統にあらざるを表白するのみか、元來の粗食に甘んじ多年の勉學に力めたれど、顔面の潤澤おのづから紅を帯びて全身の皮膚に乾燥せる色なく、眉は長く眼は細く鼻は高く口は大にして、威嚴の點と美男

の評は下し難きも、何とやら無邪氣なる溫雅の中に一種の愛敬を含みつゝ、起居振舞の餘りに靜肅なるところ今日一般の書生としては却つて活氣に乏しく見ゆれど、言語談話の聲高くして朗なるところ、寧ろ一切の舉動に反するかと思はる、また生れて衛生體育の何物たるを講ぜざれど二十六年來いまだ會て醫藥の何物たるも知らず、その衣を纏ひし時よりも衣を脱して裸體となりし骨格さらに一倍の健全を現し、暖國は長身にして寒國の如く肥肉ならざる例と山間は内その雄健を保ちて海邊の如く外その壯觀ならざる點と、凡そ故國の風土に感すべき有形的の組織ありとせば、遺憾なく完備せずと雖も吉田雄藏また確實に其中の一人たるべし、只その産聲と共に作られたる自然の本性に於ては變らざれど、境遇に依り歲月に従ひ時に應じ處に化すべき外來刺撃の第二性に於ては、山より里に出で里より都に出でて加之も丸裸の無一物より今日の何物をか得たる吉田雄藏、誰か故郷の猪猿に名残を惜

しんで出で来りし男と思ふべき、うかとすれば奇氣縦横を以て任ずる満都の才物その面を逆撫でにせらるへし、

## 其二

隠逸の君子を會釋もなく切り集めて俳優の肖顔を作る勢ひ、浮世の花よりも團子阪に限りて常さへ往來の雜沓織るが如くなれど、わづか阪の上を一二町も行けば千駄木の林町とて、その名に等しく山里めいたる林影參差の細道より根津の權現へ通する中途に、やうく三間まぐちの目にも立たざる二階家ながら、金利より割り出せし死節だらけの板張り普請にもあらで、どこやら我住居らしき格子戸の上に岡本かねといふ表札も新らしからず、御仕立物いたし候といふ軒札の墨色も昨日今日でなし、いづれ女名前に仕立物の看板かけしほどの事、まして淋しきところに内證ひツそりと

せし住居、これまでは二階の半窓も閉ぢたるまゝの用なく打過ぎしが、近ごろは更け行く間にも戸の隙間もる灯影ほつとして、宵は猶更ら障子にうつる影法師、をりく動くを見れば正しく男なり、女主人の二階に今まで見えざりし男の影法師、上も下も面は知らねど何とやら氣にかかる奴等、畜生どうすると叫んで過ぎ行くもあり、人の眼に立つ花は無けれど、過ぎし昔の春は嘘やと思はる、姥櫻の四十後家、まだ艶を含みし生え際に色くつきりと白く冴えて、木綿の常着さへ垢づかぬ身の静閑に、戀しい亡夫の忘形見か今年十二三の男の子たゞ一人を抱へて、借屋でもない内證は其日の浮世にも追はれぬ證據、仕立物いたし候の看板も冥加のための片手業と思へは、喰ふに困らす居るに困らす残る香はあり亭主は無し、あのまゝあれを白髪の婆にするかと惜しんだ近處の奴等も、その空二階に若い男が住み込んだと聞いて、また今更に自

己の腰巾着でもして遣られし如く、おもはず無念の拳を握って、南無三寶との噂とりどりで、

春とは年の瀬を越えし名ばかりの空、吹き絶えぬ北風に梢を鳴らして、梅さへ苔の封じ目まだ固く、をりく雪の頬かぶりする一月の末、まして淋しき町外れの夜に入りは人の通ふ登音もなく、かすかに聞ゆる按摩の笛と犬の遠吠なほさら耳に立ちて肌寒し、

二階の六疊より梯子段の降口に射すランプの灯影ほつとして、階下には我子の寝顔を見返りながら針の手も忙しき日限の仕立物、はや夜の十一時を過ぎて、上も下も寂然と音なき中に、たゞ鐵瓶の湧く湯音のみ際立ちぬ、

「あのウ吉田さん、階下から失禮で御坐いますが、まだ御勉強ですか、あまり詰めて

御精が出過ぎると却って貴君、いけませんよ、お茶でも入れますから、お談話かたがた、降りて入らっしゃいませんか」

いひつゝ鐵瓶の蓋を迂らして額越しに見上ぐれば、ほんとは片手に書物の上を叩きし音もろとも振り返りし如き聲、

「ありがたう、なアに、これが書生の當然で、別に勉強といふんぢやア無いんですが、しかし何時です、は、アもう十一時を過ぎましたか、それでは、そろく夜具を引き出させようよ」

「お寝みの前に、まア貴君お茶でも、あんまり湯が能く湧いて居ますから」

「ぢやア折角の思召、一喫、いたゞきませうか、寝がけに茶を入れて飲むといふ人品でも無いんですが、は、ムムム」

「さア、降りて入らっしゃい、しかし只お茶ばかりですよ、お菓子は御坐いません

から、前以て念のために申し上げて置きます、ほゝゝゝあとで御不足は聞きませ  
ンよ」

やがて靜に降り來りし吉田雄藏、木綿飛白の綿入羽織に幾度か水を潜りし雙子縞の仕  
立直し、袴を下に重ねてシャツも着ず足袋さへ穿かず、さりとして潔癖の性は襦袢代用  
に洗ひ易き白地の浴衣を肌には放さず、手足ぬツと出しながら少しも垢染まぬ皮膚の血  
色、自然の男艶に叶うて無意味の身體どこやらに一種の愛敬を含みつゝ、會釋もろと  
も火鉢の前に坐して煙草も吸はぬ體、なほさら手持無沙汰の中に行き過ぎたる當世風  
の憎氣なし、

人知れぬ内證に食ふだけの物あつて、家も残れど良人を失ひしより七八年、女主人の  
獨身に後家を立通して、寄せ來る浮世の浪風に世帯の尾も見せぬほどの女、まして作  
らば四十のうちを五歳や六歳は確に揉み消すべき容色を持ちながら、今は葉櫻の影も

靜閑に昔の花さへ語らぬ風情、そツと針の手を止めて居坐を直しつゝ、取り出す茶道  
具の扱ひも自然に馴れて腹からの下司でなし、

「さア吉田さん、お茶は悪う御坐いますが、たゞ熱いのを御馳走に召し上ツて下  
さい」

「や、結構です、どうして、なか／＼善い茶だ」

「なアに貴君、番茶ですよ、お互に斯う、お心易くなつた以上お世辭は吉田さん、取  
ツて仕舞ひませう、どうせ行き届かない勝ですから、お氣に召さないとところは御遠  
慮なく言ツて戴いて、その代り及ばない事は、及ばないまゝで御勘辨を願ひますよ、

ほゝゝゝ」

「お世辭、何この書生肌に世辭なんかありますもんか、あるものは無遠慮と無作法ば  
かりですよ、實は萬事あまり氣を付け過ぎて下さるから、却ツて居辛いやうな時が、

は、う、う、しかも早いもんだ、お世話になつて以來もう三月越しになる」

「おや、さうなりますか、なるほど去年の十一月でしたねエ、最初、入らした時は大變、むづかしい方だと思つて少しは氣も置けましたが段々お心易くなつて、近來は、つい失禮ばかり、第一お世話どころですか、手前こそ貴君のやうな方に來て戴いて、どれほど心丈夫になりましたか、また二言目には書生々と仰しやるが、萬事、よく存じし居りますよ、立派な學校を卒業なすつて、いつ何時でも充分な御身分になれる方だと、あのお常さんに聞いて居りますから」

「は、う、う、つまらない、餘計な事をいふもんだ、しかし彼お常婆さんは氣の好い人でね、僕が先生の家に居つた自分も萬事よく深切に世話してくれましたよ、ありやア女主人の古い馴染ですか」

「いえ貴君、實はね、もと手前方に出入した大工の妻女で御坐いますが、運わるく亭

主に捨てられて子も無いといふ理由で、かはいさうに貴君、あの年まで奉公して居りますのさ、また手前方も其後の不運続きで一時相應に暮しました家作も地面もなくなり、こんな小さな家へ落魄れて、其上また良人に死なれるし、過ぎた事は一切ただ夢のやうに諦めて居ります中で、ほ、う、う、申さば後家同士の舊の馴染で、どこに奉公して居ても昔を忘れず尋ねて來てくれますよ、ところが去年の十月頃でしたか、ふと來ました談話の序に、今、御奉公してる御屋敷に斯ういふ方があつて、どツか蒼蠅くない素人家の二階でも借りたいとの事から其他いろく委しう貴君の御様子を承つて、それでは幸ひといふやうな理由で、ほ、う、う、ですから其お屋敷の旦那様が博士とかいふ大學者で、また貴君も尋常の書生さんで無かつた事まで、よツく存じて居りますの、しかし吉田さん、女の妾どもが浅い料簡では、何時でも立派な御身分になれる筈の貴君が、まだ其上の御勉強とはいふもんの、こんな二

階に只お一人かうして御不自由勝に在らッしやるのが勿體ないやうで、何だか惜しいやうな氣が致しますよ」

「は、は、は、實際さうなら宜いが、何、また迎も無効ですよ、これからが勉強の最中で、やうく卵子の殻を出たばかりさ、せめて三五六の後にでもなれば、また身を立てる工夫もしますがね、まづそれまでは御覽の貧乏書生を押ッ通す決心です」

「おや、まア吉田さん今、貴君は二十六でせう、三五六といへば此後まだ十年もありますよ」

「さやう、少くとも此上、十年ぐらゐ一所懸命に遣らないと迎も人間らしい人間にはなれませんよ、生意氣な事をいふやうですが、無事に飯喰ふのが目的でも無いんですからなア」

「なるほど、御希望が大きいだけ世間普通の方と違ッて、なか／＼お骨が折れますねエ、しかし吉田さん、お國の親御や御兄弟が嘸まア、お待遠く在らッしやるでせうね」

「なアに國に兄と姉はありますが、もはや兩親とも無いです、これでも親が居れば、また一時も早く家を持つて孝行をしたくなるでせうが、風木の感で子は養はんとすれど親は在さず、しかも生れた國が國ですから、その兄や姉に東京へ來いと言ッたところが、かう人間が隙間なく押し合ッて住む市街の中へ出る筈が無いですよ、日に一度ぐらゐ猪か猿の顔を見ないと何だか物足らないやうな山家ですもの、は、は、は、は、は、」

「あら、御戲談ばかり、いくら何でも、そんな土地がありますものか、日に一度も獸類の顔を見ずに濟まないのは動物園の吏員ですよ、は、は、は、は、は、」

「なるほど都人の料簡ぢやア、さうでせう、しかし實際だ、僕も東京へ來てから始め

「噂に聞いた米の飯を喰ったんですぜ、この白い米の飯は女主人、僕の故郷ぢやア眞珠の粒を嚙むやうなもんだ」

「おや、眞實で御坐いますか、もし眞實のお談話なら、失禮ですが、そんな深い山國に生れた貴君が今こゝまで御修行の積んだ上、まだく御勉強なさらうといふのは實に、猶更、お見上げ申した事で、よくまア世間の書生さんが結構な國の親御を泣かしたお金で、學校は落第ばかりして遊んで居られるかと思ひますよ、私も此通り今年十二になる男子が御坐いますが、どうか貴君のやうな方に仕込んで戴きたいと考へますよ」

「は、は、は、僕のやうなもんに仕込まれちやア白髪が交つても破れ袴を穿いて家の持てない奴が出来ませ、しかし伶俐な子だ、才物になる生來だ、まして一粒種だから大切に立派に、行末を樂しんで、お育てなさい」

「いえ吉田さん、一粒では御坐いません、まだ姉が居りますよ」

「は、ア、さうですか、ぢやア猶更お樂しみだ、その姉さんは今、どこに」  
 「はい、名は春と申して、ことし十七になりますが、小石川の或お屋敷方へ御奉公に出して御坐います、不束なもんでも女親は女の子で、あとに十三の男子一人を相手に淋しくは思ひますが、手許に我まゝばかりさして居つては却つて本人の爲になるまいと存じまして、去年の夏、ところが吉田さん、妙なものですよ、家に居ります時分は、まるで小兒のやうな事ばかりして居ましたから、すぐ遁けて歸るかと思ひましたよ、ほ、ほ、ほ、どうか斯うか其まゝ、案じるより易いもんでねエ」

「そりやア結構です、十七の姉さんに十三の弟とは宜い同胞だ」  
 「宜い同胞でも貴君、前途に餘地のある弟と違つて姉は心配で御坐いますよ、いくら氣は小兒でも年が十七といへば、もう直に何とか、出来ないながらも身の始末をし



てやらねばなりませんからねエ、わけて足らぬ勝の手薄い女親一人の娘ですから、考へて見ると心細い、かはいさうなモンで御坐いますよ」

「なるほど、子に於ける親の心は容易なモンで無いですな」

「眞實で御坐いますよ、どうせ妾どもの娘ですから、此方で奸む事は出来ませんが、もし縁さへあれば、氣立の優しい深切な方で、今は兎も角、行末の見込ある人なら、假令どんな苦勞をさしても、かまはない決心で居りますの」

「いや御道理です、ところで十二時に近くなりましたな、もう一喫お茶を貰ッて寢ませう」

「おや、うかくと自分の勝手な事ばかり、お饒舌をして、さぞ御迷惑で御坐いましたらう、あら吉田さん、もう其お茶は出ませんよ、お待ちなさい入れ替へて差上げますから」

「何これで宜しい、實は白湯で澤山だ、汲み置きの水でも濟むといふ便利に出来た身體ですよ、は、は、は、は」

「まア酷い事を仰しやる、いくら御丈夫でも貴君、お身體を大切になさらないと不可ませんよ、わけて今夜のやうな寒い晩は、うツかりすると、お風を召しますよ、失禮ですか妾方の夜具を一二枚お貸し申しませうか」

「有難いが猶更ら以て、それに及ばないです、北風の吹き入る破れ窓の中で膝小僧抱き寝に空腹の寒夜を凌いで来た結果、此くらゐの寒威ぢやア丸裸の轉び寝をしても高軒ですよ、まして身體の上と下に綿の這入ったものを一枚づつ着て寝りやア天上界の安樂國、もし引けば風よりも熱を引きますな、は、は、は、は」

今この境涯に無くて叶はぬ必要の書籍と夜具とは一間の押入に藏めて餘地あり、身は三尺の机に向うて更に狭からず、志は九尺の半窓より遙の蒼空に伸べて、六疊の二階一間を暫時の假の宿、朝は根津權現の森に啼く鴉の聲と争うて目を覺し、夜は千駄木の梢を鳴らす風の音さへ死して後に枕を擁し、とろくと睡る半夜の夢に腦を休めてたゞ一人こゝに寂寞と書を讀む時は木像に似たり、

されどこの木像、默然として愚鈍なるが如き中に一種不撓の論を保ち、端然として溫和なる裡、一片不屈の説を持し、その言ふところと行ふところとを見れば、さながら引汐に現れたる洲を再び音なき潮の食むに等しく、いつしか人をして油斷大敵に襲はるゝの感あらしめぬ、

されば前後六年の間に幾千人といふ同窓の學友中より、常に默々たる此木像が最後の勝利に優等第一の首座を占めて業を卒へしのみか、その幾千人の學友中に今この六疊の二階を訪ひ來るもの一人もなく、自己また歩を運んで訪ひ行くもの一人もなきは、殆ど交際の何物たるを知らざる孤獨乾燥の無情漢に似たれど、誰か知る斯の無情漢には骨肉にも勝る刎頸の友あり滑かに流るゝ油の如き情もありて、ために人知れぬ無言の熱き涙を注ぐところは今日の輕薄才子が小説に於ける戀の外さらに解し得ざるべし、

朝夕は猶いまだ冬のまゝなれど、流石に風なき晝は二月の末の日影、いつしか長閑なる春の心地して、はや藪鶯の初音ゆかしく、おもはず讀書の耳を敬てながら、机に片肱かけて背後の半窓を見返る折しも、門口の格子戸がらりと開いて、吉田雄藏といふもの居りますかとは正しく上田力、例の大兵より破鐘の音響に等しく呻り出す聲この二階の隅まで手に取る如く聞えぬ、

儲はと其まゝ二階を駆け降りて、今しも出迎ひし女主の背後より會釋すれば、いつも

ながら五尺八寸二十貫目の達磨然たる大眼球に見て取ツて、

「やア吉田、居ツたかい」

「さア兎も角、二階へ、二階が城廓です」

わづか六疊の二階一室に掛けたるほどの梯子段、みしりくと音さして昇り行く上田の體、さながら蟊蛙の蟲を覘うて巖に這ひ上るが如し、

「む、こりやア宜い二階だ、左右が壁で前後が半窓の六疊、しかも往來が騒がしからず裏手に家が建て詰らず、一人で勉強するにやア持つて來いの巢だ、どうして君、かういふところを見付け出した、なか／＼善いわい、しかし探したぜ、手紙で町名も番地も心得て來たが、何分この邊の地理に暗いから、ぐる／＼と廻ツて、よほど探したよ、あとで今、考へて見ると御苦勞千萬この門口は馬鹿な面して二度ばかり通ツたんだ、は／＼／＼」

「さうですか、は／＼／＼しかし、よくあるこツてすよ、實は來て貰はうといふ料簡でなく、明日にも伺ふ心算で居たんですが、儲あのま、不意に三月越しも隠れて、また唐突に伺ツちやア、あまり勝手過ぎた業と思ひましたから、まづ手紙で」

「なアに其邊の事に會釋も何も入ツたもんか、また例の一件で不意に暫く音信を絶ツたといふ事も承知して居たさ」

「いち／＼、さう、お察しが善過ぎても却ツて困りますが、その後の柳島は如何ですな」

「悲しむべし依然たる賭博公開發の川上三吉さ、いくら何と言ツても斷乎として動かない、儲その段になると殆ど鐵石に等しいもんだ、彼の彼たる所以も寧ろ今日に於ては大なる害だ、しかし吉田、君も不可ぢやアないか、川上と僕の間板挟みとなツた苦し紛れといふ事は承知してるが、そも／＼我々の流に善惡とも身を避けると

いふ事があるもんか」

「いや、避けた理由ぢやア無いんです、決して、苦し紛れに隠れた理由でも無いんです、それに就いて三月越し、こゝに潜んで居た所以を事實に照らして辯解いたしませう、あはして柳島へ明日ともいはず今日、すぐに御同行しませう」

をりしも女主が階下より茶と菓子を持ち運びて、慇懃に會釋しながら差出せば、吉田おもはず振り返りて、

「女主人、こりやア僕の兄です」

「おや、さやうで御坐いますか、始めて御意を得ますが、よくまア御遠國から、わざわざ、定めて東京は蒼蠅くつて塵埃ツほく思召しませうね、どうせ外に貴君お宿をお取りなさいますなら、御不自由でも御一緒に手前方で御遠慮なく、ねエ吉田さん、其方だ萬事に就いて御便利でせう、第一、土地の御不案内な方を宿屋住居をさ

せ申しては、無用心で御坐いますよ、なか／＼東京といふところは油斷のならない場所ですから」

いひつゝ、微笑を含んで茶を進むれば、上田おもはず五月人形の武者に似たる眉うち顰めながら、鼻の如き眞丸の大眼睛を剥き出し、夜着の袖に等しき唇端を尖らして、じろ／＼見廻す體、吉田も共に小首を傾けしが、はつと心付いて俄に吹き出さんとする。呵しさを、そのまゝ奥歯に咬み殺して呑み込むや否、

「女主人、こりやア僕が悪かつた、兄は兄分ですが故國の山奥から来た兄でない、やはり東京に居る友達で、兄も同然な男と言つた意味でした、は／＼／＼／＼／＼／＼でもない感違ひをさして濟みません、實に悪かつた、は／＼／＼／＼」

おもはず大聲に吹き出して笑へば、わが過誤ならねど今更ら取返しもならぬ此場の不首尾に、氣の毒や四十女が顔を赤くして差俯いたるまゝ、吉田さん酷い方との一言も

ろとも遁ぐるが如く梯子段を駈け降りぬ、  
あとに上田は猶も不審の眉を寄せながら、

「おい、吉田、全體、どうした理由だ、變な奴ぢやアないか」

「は、は、は、笑ツちやア猶更ら雙方へ濟まないこツてすが、殆ど自然の滑稽だ、實は過  
日の夜、あの女主人に故國の事をいろ／＼と語ツた時、兩親はないが兄と姉があッ  
て加之も山また山の奥の山家で、せめて日に一度ぐらゐる猪や猿の顔を見ないと物足  
らない氣のするやうなもんが、かう寸隙なく人間の押し合ッた東京へ出て來る筈は  
無いと笑ツた其談話の矢先へ今日、不意に貴兄が見えて、こりやア兄だと言ツたか  
ら、女主人、故國の實兄と間違ッて、あゝいふ變な挨拶をしたんですよ、は、は、は、  
は、は、は、」

「なるほど、こいつア面白い、如何にも奇だ、しかし無理のないところだね、この不  
出來な面と、この大い無恰好な圖體と、しかも無遠慮で無愛敬で下手な今戸燒の達  
磨然たる僕を初めて一見すりやア誰だツて都門に十餘年も居ツた人間たア思はない  
さ、ところへ君が山家生育の前口上あツた時だもの猶更ら以て、さう思ツたなア當  
然さ、しかし日に一度ぐらゐる猿や猪に御挨拶しないと氣の濟まない男に見られたの  
は聊か酷だね、少々かはいさうだよ、は、は、は、は、まさか君、これでも九死一生の場  
合に竹の筒へ入れた振り米の音を聴いて極樂へ行く人の子でないからねエ、はツは  
ツはツ」

「いや、どうも、はや、かうなると雙方へ對して申譯が無い」

「なアに僕ア宜いさ、むしろ滑稽で面白いが、階下の女主人に氣の毒だよ、辭去がけ  
に何とか慰めて歸らう」

「どうか、さうして貰ひたいです、なかく確乎してるやうでも大體が内氣の女です

から、よほど面目が悪かつたでせう、はゝゝゝゝ」

「眞實、考へるほど呵しいわい、はゝゝゝゝ」

おもはず互に聲を合はして笑ひしが、また俄に額を鳩め膝すり寄せて私語低聲、およそ一時間あまりの後、さらばと二人もろとも相伴うて二階より降り行けば、流石に浮世馴れたる四十女の年甲斐、今は顔も赤めず氣輕に打笑うて、

「おや、東京の御兄様お歸りで御坐いますか、只今は實に失禮な事を申し上げまして、

ほゝゝゝ」

「やア女主人、東京の御兄様よりも、やはり猪や猿と一緒に兄の方に近い面ですよ、はゝゝゝゝ時に吉田が大變いろく世話になるやうですな、何分あゝいふ罪の無い間違ひをやらかす男ですから、よろしく頼みます、おい吉田、何とか謝して置けよ」  
「女主人、實に濟みませんでしたな、つい言葉が足らないで」

「いゝえ妾が狼狽もんですから、よくも貴君お聞き申さないで、あんな見當違ひな事を、もし捌けない方でもあれば、其場で直どんな、お小言を戴くかも分りませぬもの、しかし吉田さん御一緒に御外出で御坐いますか」

「さうです、ちよいと急な用で、事に依ると今夜ア歸れないかも知れませんから、宵のうちに戸を閉めて仕舞って下さい、もし遅く歸れば御迷惑でも叩きますから」

「それでは、さうして戴きませう、何時でも起きますから、しかし吉田さん、あんなり寢心地の宜いところで貴君お宿泊なすつちやア不可ませぬよ、ほゝゝゝゝ」

「なアに大丈夫だ女主人、この野猪が附いて居ますから、はゝゝゝゝ」

そのまゝ二人もろとも伴うて門口を立出でんとすれば、出合頭に十七八の色くつきりと水際立ちし娘、文金の高島田に紫縞子の丸帯いとゞ冴えて、華美ならぬ袖縞の袖袂も何とやら晴れ合ひつゝ、いきくと張り切つたる眼元おもはず身を片寄せながら、靜

に會釋して二人の出づるを待つ風情、梅花一輪そつと無心の垣根に宿るが如し、折しも二人を送り出でし女主が目早く認めて、

「おや、お春、さア貴君方どうか、おかまひなく、それは手前の娘で御坐いますから、お春や和女、その後からお出ましになる方へ此ごろ二階をお貸し申してあるんだよ」

のそりと上田まづ立出づれば、つゞいて吉田も首肯くが如く娘に目禮しながら、二人もろとも見返りもせず凡そ半町あまりも過ぎし後、

「おい吉田、あの家は不可せ、出て仕舞へ、亭主のない女主人で、あんな娘があつちやア猶更ら瓜田の履だ、李下の冠また忽にすべからざるこつたぞ」

「は、は、は、吉田雄藏です、第一あの娘は今日、始めて見たばかり、どツか小石川邊に屋敷奉公してるさうですから」

「それにしても娘は娘だ、あの通り歸つて来るぢやアないか、君は宜いが、蒼蠅いよ世間の奴等ア、得て入らざる事を言ひたがるもんだ」

「ぢやア、どツか外へ見付けて移轉しませう、しかし今日これから柳島へ往つた結果で、また今まで通り博士の家へ歸るやうになるかも知れませんなア」

「なるほど、それも、さうだな、ところで今日、川上に對して君は何といふ心算だ」

「つまり無用の辯を費すに足りません、三月の間、不意に隠れたやうなもの、頼まれただけの調べものは彼博士の許にあると等しく引續いて力を盡した結果、こゝに、これだけの材料を蒐めて持つて居るんですから、決して其意に反いた事實は無いで、しかし吉田雄藏また別に一個の意見として、先刻も御覽に入れた通り一部の草稿およそ百五十ページに餘る反對説を持つて居ますから、これを見せた上で、その取捨に就いて、また何とか、兎も角あゝいふ決心力の強硬な人は注的より開發的

で無いと効がありますい」

「よし、ぢやアその覺悟で行かう、しかし實に辯者だからなア」

「ですから黙ッて、頼まれた材料と共に反對説の草稿を突き付けて可否の一言を聞く

理由です」

「なるほど、む、なるほど」

#### 其四

山また山の奥より出でて身は多年の風雨に曝せども心は浮世の塵にも垢にも染まぬ吉田雄藏と、うまれ得たる天生の潔白に苦學十年の結果は却ッて當世の反比例を來せる上田力と、相伴うて歩める體いかにも一種の奇氣を帯びて、おのづから時流に殊なれる風俗容貌、ほめて言へば輕薄の俗を放れたり、わるく見れば骨董の珍に近し、

されど山生育の吉田に人知れぬ大俗中の議論と主義あり、また達磨に似たる上田に案外の洒落と滑稽ありて、ともに我みづから我一流を守りつゝ、車馬喧騒の巷に翩翩たる眼前の才子才物を笑ふの概あれば、悠悠として事に迫らず、のツそりとして物に驚かず、吉田が履き古したる麻裏草履ほそく、上田が齒の缺けたる日和下駄からく、あれでも世の中の金と女に氣はあるかと往來の眼に怪しまれながら、根津より谷中の一端をぬけて斜めに上野の池の端まで歩みしころ、都下百萬の人が其日に於ける咽喉三寸の苦樂貧富を分つべき午砲、どんと鳴り響きぬ、

されど上田も吉田も途中たゞ一時の空腹に直接の金錢を費すべき男ならねば、互に平然として舌端の唾も呑み込まず、そのまゝ、打連れて語りながら、ふと何心なく見れば、三枚橋の際に車を乗り捨て、此方へ來かゝる一人の男、烏賊の磔めいたるトンビ姿も野暮の骨頂とや駱駝地を日本流の長合羽に仕立てたる洒落姿、同じ色の烏打帽に太き



葉卷の煙を吹きつゝ、両手を懷中に差入れて鼻唄の一節も呻りかねまじき面は例の黒田健次、ぞろりとして一見これはまた當世時流の汐先を二三町も走り過ぎたる體なり、「おい吉田、あれ見ろ黒田の奴が來たぜ、待合の亭主となつて以來、野郎ますく満腹の俗氣を漲らして、のこく何處へ行くか、幸ひ今日は一番ぐつと閉口さしてやるから君、をかしく救濟説を取つちやア不可せ」

「なるほど烏森の先生だ、しかし今日この途中で、わざく此方の暇を潰して閉口さすにも當らないでせう、また其うち」

「いや、逢つた時の勝負にしないと面白くない奴だ、まア黙つて君は見て居るさ、いはゆる局外中立だ、はゝゝゝ」

さらぬも眼に立つ二十貫目の大兵、のそくと歩を早めて進めば、何氣なく葉卷の煙を吹いて出で來りし黒田、はつと思はず立停つて満面の苦笑ひ、化け損ねたる狸に似

たり、

「やア上田、こりやアどうも、妙なところで出喰はしたな、はゝゝゝ」

「何、妙なところで出喰はすもンか、此處ア正しく上野だ、しかし貴様どこへ行く、行く的に依つちやア随分、同伴つてやるぜ、乃公ばかりで無い、幸ひ吉田も居るから」

「や、なるほど吉田も居るね、前途ますく多望の奇傑二人うち揃つて、つまり紛々たる俗界を冷眼一過の散歩といふ理由かね」

「奇傑二人たア變な挨拶する奴だな、おい吉田、ところで腹が空いたね、どうだ黒田、貴様まだ晝飯は濟まないだらう、ちやうど今が十二時だ、但し濟んだか、まだなら奢つてやるぜ、日本料理西洋料理乃至また折衷料理お好み次第だ、いくらでも金に文句は無いぞ」



「ぢやア君、先刻から君が、奢る〜といふなア實際その君が奢る意味かい」  
 「知れた事いへ、貴様のやうな奴に不淨財の一端で奢って貰った食物が堂々たる丈夫  
 兒の胃の腑に這入るもんかい、淺草の猿に人參や大根の帶を呉れると一般、乃公の  
 方から奢ってやるんだ」

「や、こいつア恐れ入った、いよく痛み入った理由で猶更ら御辭退を申したいね、  
 僕が囊中を逆倒に充分の馳走をしてさへ寸隙がありやア遁け出さうと思ってるくら  
 るだ、まして君、君の君たる所以に奢られちやア實に堪らないよ、どうか許してく  
 れ、せめて僕に奢らしてくれ、おい吉田そも〜斯る場合に平生より溫和説の君が  
 半笑ひの見物で濟むかい、この紙入を此ま、君に渡すから臨時の會計掛になつてく  
 れ、いやはや、とんでもない慈善家に出喰はしたわい」  
 「喧しい、黙って隨從て來い、また吉田うかく〜此奴の術に乗ると不可ンぞ、さア兎

も角、歩いたく、上野の山内の隅から隅まで運動して猶この上に腹を減した後、  
 そろ〜淺草へ出掛けて何を奢ってやらう」

これが昨今たゞ面みて物いうたばかりの交際か、但しは多少の世間體に聯りて身に常  
 職の閑暇なき男か、また人知れぬ内心の色氣と慾氣でもある奴ならば、鼻息に吹き飛  
 ばすも易く口頭に追ひ歸すも易く眼前の利を喰はして蹂躪るも易けれど、奈何せむ自  
 己みづから承知の野暮で頑固で無慾で無遠慮の上に入らざる道理と油斷のならぬ滑稽  
 を含みし十餘年來の親友、遁け出せば巡查の前でも飛び來つて搦むの面倒あり、争へ  
 ば往來の人中でも破鐘の聲を張り上げて議論するの恐れあり、まだ圓轉滑脱の間に呑  
 吐せんとしても元來この我を根本的に知りぬいたる奴、とても今更ら遁るゝ道なく叶  
 はぬ敵と觀念しながら、なほ間隙さへあれば吉田に紙入を渡さんとする體、上田じろ  
 じろ背後より睨んで、



「いや、酷く御氣に觸りましたな、しかし由來の恩を荷ふこと多き後進の吉田が先輩の黒田健次その人に對つて禮を失したとは思ひません、さらに思はない、斷じて思はない、悲しいかな今は只これ一個の醜業者たる待合の御亭主を見るのさ」

「さうだ、淫賣宿の亭主野郎を見るのみだ、まだ吉田は此奴に對つて貴兄とか何とか言葉に多少の眞面目を含ますから不可ない、お察し申すも御氣に觸るもあつたもなか、ぐづく吐しやア幸ひ上野の山内で四邊に人はなし鐵拳こゝにあり、どうだ黒田、それほど腹が空いて喰ひたくば去年の冬あの川上の家で喰ひ損ねた味を今ここで舐めさしてやらうか、いや鳥や獸類のやうに喰溜が出来ないの山の奥に育つた仙人の子で無いのと、怪しからん事をいふ奴だ」

「は、は、は、どうも叶はない先生達だ、ちよいと軽い洒落にも滑稽にも直と眞ツ四角な、切石のやうな重い理窟を敷き詰めて來るから閉口だ、は、は、は、誰が今更ら吉田

を捕へて野暮に怒る奴があるもなか、たゞ聊か與みし易しと見て取つた吉田に鋒を向けて うまく行けば威喝的の遁路を作る心算だつたのさ、ところが吉田また與みし易からず上田の氣焰いよく激烈で、もはや此上は萬事こゝに休せりだ、しかし腹が減つたよ、腹が減つたばかりなら君まだ辛抱もするがね、がう伸べつ幕なしに激しく歩かされちやア實に堪らない、どうか此邊で僕に奢らしてくれよ」

「は、は、は、貴様のやうな根性骨の張り切つた横着な奴だから、たとひ義理ある借金取に出喰はしても容易に出すまいよ、ねエ、ところを乃公が雑言無禮の糞叩きに叩かれながら、半泣きの面で奢らしてくれたア聊か物の哀れだ、なるほど考へて見ると多少まだ昔を忘れないところが、あるらしいわい、しかし黒田、貴様の身に取つちやア、とんでもない惡縁の深い嫌な友達を持つたなア」

「いや、決して惡縁の深い嫌な友達とも思はないが、現在こんな目に逢はされちやア

事實<sup>じじつ</sup>また善縁<sup>ぜんえん</sup>の有難<sup>ありがた</sup>い好き<sup>す</sup>な友達<sup>ともだち</sup>とも思<sup>おも</sup>ひかねる次第<sup>しだい</sup>さ、は、は、は、

「さういへば十中<sup>ちゅう</sup>の一理<sup>り</sup>また無<sup>な</sup>きにしもあらずだ、さらば此<sup>この</sup>くらるで上野<sup>うへの</sup>を切り上<sup>あ</sup>げて、ねエ吉田<sup>よしだ</sup>、そろく浅草<sup>あさくさ</sup>の方面<sup>ほうめん</sup>へ出<sup>で</sup>ようか、さア黒田<sup>くろだ</sup>、歩<sup>ある</sup>けよ、もう少<sup>すこ</sup>しだ、いくら遅<sup>おそ</sup>くツても二三十分<sup>ぶん</sup>で行<sup>ゆ</sup>けるから」

「おやく、また浅草<sup>あさくさ</sup>まで引<sup>ひ</sup>き摺<sup>ず</sup>られて行<sup>ゆ</sup>くのかね、せめて鐵馬<sup>てつば</sup>の便<sup>べん</sup>をかりたいなアわづか一區<sup>く</sup>三錢<sup>せん</sup>だ、圖<sup>づ</sup>ぬけた大男<sup>おほをとこ</sup>一人<sup>ひとり</sup>と世間<sup>せけん</sup>普通<sup>ふつう</sup>の體量<sup>たいりやう</sup>二人<sup>ふたり</sup>を積<sup>つ</sup>んで其<sup>その</sup>搭載<sup>たふさい</sup>料<sup>りやう</sup>は最少<sup>せうせん</sup>銀貨<sup>ぎんくわ</sup>一個<sup>いこ</sup>に及<sup>およ</sup>ばざるの至廉<sup>しれん</sup>至便<sup>しべん</sup>、實<sup>じつ</sup>に今日<sup>こんにち</sup>の賜物<sup>たまもの</sup>だねエ」

「まア何<sup>なん</sup>でも宜<sup>い</sup>いから早<sup>はや</sup>く歩<sup>ある</sup>けよ、鐵道<sup>てつどう</sup>馬車<sup>ばしや</sup>より持<sup>も</sup>ツて生<sup>うま</sup>れた膝栗毛<sup>ひざくりげ</sup>が至廉<sup>しれん</sup>至便<sup>しべん</sup>だ、また幾何<sup>いく</sup>ら踏<sup>ふ</sup>ンでも大地<sup>だいち</sup>は無價<sup>ただ</sup>だ」

上田<sup>うえだ</sup>と吉田<sup>よしだ</sup>の二人<sup>ふたり</sup>に囚人<sup>しゅうじん</sup>の如<sup>ごと</sup>く前後<sup>ぜんご</sup>を守<sup>まも</sup>られて、馳<sup>は</sup>せ違<sup>ちが</sup>ふ人車<sup>くるま</sup>の砂塵<sup>すなほこり</sup>を浴<sup>あ</sup>び頻<sup>しき</sup>りに通<sup>かよ</sup>ふ鐵道<sup>てつどう</sup>馬車<sup>ばしや</sup>を見返<sup>みかへ</sup>り見送<sup>みおく</sup>りながら、廣德寺<sup>くわうとくじ</sup>前<sup>まへ</sup>より埋堀<sup>うめぼり</sup>を經<sup>へ</sup>て本願寺<sup>ほんぐわんじ</sup>の寺中<sup>じちゆう</sup>を通<sup>とほ</sup>りぬけ

やうく浅草<sup>あさくさ</sup>の雷門<sup>かみなりもん</sup>まで行<sup>ゆ</sup>きし頃<sup>ころ</sup>は午後<sup>ごご</sup>四時<sup>じ</sup>過ぎ、さらに田舎者<sup>ゐなかももの</sup>の見物<sup>けんぶつ</sup>めいて仲店<sup>なかみせ</sup>を引步<sup>ひきある</sup>かされ、また境内<sup>けいだい</sup>を一時間<sup>じかん</sup>も追<sup>お</sup>ひ廻<sup>まは</sup>されて、公園<sup>こうえん</sup>裏<sup>うら</sup>に出<sup>い</sup>でし頃<sup>ころ</sup>は五時半<sup>ごはん</sup>を過ぎぬ、

「ねエ吉田<sup>よしだ</sup>、あんまり可哀<sup>かはい</sup>さうだから此邊<sup>このへん</sup>で黒田<sup>くろだ</sup>に何か奢<sup>おご</sup>ツてやらうぢやアないか」「さうですな、もう宜<sup>い</sup>い時分<sup>じぶん</sup>でせう」

「おいく上田<sup>うえだ</sup>と吉田<sup>よしだ</sup>の兩奇傑<sup>りやうきけつ</sup>、今更<sup>いまさ</sup>ら何<sup>なに</sup>を相談<sup>さうだん</sup>してるか知らないが、もはや黒田<sup>くろだ</sup>は奢<sup>おご</sup>らしてくれと言<sup>い</sup>はないぞ、さア約束<sup>やくそく</sup>通りだ、奢<sup>おご</sup>ツてくれ、奢<sup>おご</sup>ツて貰<sup>もら</sup>ひたいもんだ、たとひ洒落<sup>しゃれ</sup>でも滑稽<sup>こつげい</sup>でも言<sup>げん</sup>を食<sup>は</sup>み人を欺<sup>あざむ</sup>くやうな平生<sup>ひせう</sup>の御人體<sup>ごじんてい</sup>ぢやアあるまい、何を奢<sup>おご</sup>ツてくれる筈<sup>はず</sup>だ、さア奢<sup>おご</sup>ツて戴<sup>いた</sup>かうか」

「黙<sup>だま</sup>ツてる、ちよいと今<sup>いま</sup>、考案<sup>かうあん</sup>中<sup>ちゆう</sup>だ、同じ奢<sup>おご</sup>ツてやるにしても、なるべく馳走<sup>ちそう</sup>してやらうと思<sup>おも</sup>ツて考<sup>かん</sup>へ中<sup>ちゆう</sup>だ、貴様<sup>きさま</sup>また同じ御恩<sup>ごおん</sup>に預<sup>あづか</sup>るなら美味<sup>うまい</sup>いもの、方が宜<sup>よ</sup>からう」

「御意の通りだ、ぢやア黙ッて差控へてるから萬々よろしく頼むぜ、おい吉田、君も今この場合となつて責任は免れないぞ」

上田おもはず微笑を含んで、懐中より取出せし一錢銅貨三枚と五厘銅貨一枚、うやうやしく掌上に上せて吉田を見返りつゝ、黒田の鼻頭に突き出しぬ、

「さア黒田これだけ奢ッてやるぞ、かりそめにも一人前が一錢一厘六毛餘だ、おや此奴、變に妙な面をするぢやアないか、そもくこの錢が通用しないか、何、そんな鼻糞で喰へるものが無い、無いもんか、あるぞ、大いにあるぞ焼芋だ、しかし轉び藝妓や馬鹿客の喰ひ荒した残肴冷酒に馴れた待合の亭主腹へ、十有餘年來の親友が眞情を込めた焼芋を容るゝの餘地ありや否や、どうだ」

「喰ふ、大に喰ふから奢ッてくれ、さア何處で喰ふんだ」

「はゝゝゝ、此奴いよく捨鉢になつて來たな、しかし宜い料簡だ、ぢやア附いて來

い、喰はしてやるから」

上田は固より覺悟の前なれど、黒田は呆れて驚いて腹立まぎれの自棄腹、空腹、むしやくしや腹、あとで口直しの會席料理でも喰はんと面相、さらに勢ひ込んで歩み出せば、吉田おもはず吹き出しぬ、

やがて半町ばかり行きし左側に、折しも夕ぐれ近き餘寒の珍味たゞこればかりと、釜の半面を取圍んで先を争ふ下女子守の頭上より仁王の如き片手ぬツと差出して、三錢五厘と叫びつゝ、振り返れば吉田と黒田は門口に立ちぬ、

「さア黒田、約束通り奢ッてやツたぞ、これ見ろ、しかも川越の本場だ」

いひつゝ三分して一分を黒田に興へ、残る二分を吉田と共に上田まづ大口あいて喰へば、おのれ一人が小袖の重ね着に駱駝地の長合羽を羽織りて絲絛の兩ぐり下駄に八幡黒の鼻緒といふ風俗、なほさら人目に立ッて往來の丸かぶりは聊か閉口せしが、今こ

の場となつて退くに退かれぬ二人の面當、わざと平氣に芋の皮を剥きかけし手元、吉田ちらりと見て微笑を浮べながら、

「黒田さん、その芋の皮は後で喰ふ心算ですか」  
 きくや否、上田おもはず手を拍つて、

「妙々、いかにも警句だ、さア黒田その芋の皮を捨てる事ならんぞ、喰つて仕舞へ錢の端だ」

流石の黒田も張り詰めし勇を一時に失うて、いよく今は最後の悲鳴をあけぬ、

「おい上田、吉田、人死の出来る飢饉年が来りやア土でも石でも嚙るから、今日だけは許してくれ、逆も僕ア君等に叶はない凡俗だ、諺にいふ餅の皮は剥かずとも、せめて芋の皮ぐらゐは剥いて喰ひたいよ、は、は、は、また由來どれほどの氣に觸つた事があるかア知らないが、五時間の餘も喰はず飲まずに引き摺り引廻して奢る奢

ると言つた結局の果に一錢一厘六毛の御馳走で追ひ拂やア、もう澤山だ、いかな溜飲も下るだらうから、此邊で御放免を願ひたいもんだな」

「は、は、は、いよく、往生しをツたわい、ぢやア吉田そろく歸らうか、しかし黒田今日に限らないぞ、今後どこで喰はしても見付け次第に此通りだ、どうせ捨てた奴でも面を見りやア儲また昔の情が湧いて来て捨て、も置かれないから、わざく暇を潰して、つまり貴様がために頂門の一針だ、ねエ吉田」

「如何にも、さうです、ところで黒田さん、願はくは今日の馬鹿にされた事を心外に思つて下さい」

黒田おもはず俯したる頭をあけて、額越に夕暮の空を見上げながら、

「善惡の巷に蟠つて左右の腕を自由自在の男一疋、どこを飛んでも跳ねても五體の急所を見せる僕ぢやアないが、さて怖るべきものは多年の間に皮肉を喰はれた友達



の情だ、逆も力や理窟で叶はない、何故また君等ア僕を捨て、仕舞ッてくれないんだ、苦學十年の結果を泥水の底に抛け込むやうな奴、わざと氣を揉んで過ぎた昔の餘情を寄せるだけの價値は無いだらうぜ、しかし上田は上田そこが所謂上田として、おい吉田、君は汐入村の後殿を承ッて、これから世の中に駈け出さうといふ人間だ、もう少し頭腦を冷かに持たないと不可ぜ、僕の如き奴に未練を残して情に捌るやうぢやア前途また賞すべくして惜しむべきの結果を來すぜ、上田は尊ぶべく倉橋は感すべく川上は恐るべく斯くいふ黒田は捨つべき奴だ、そこで上田の情は僕ここに涙を以て感謝するが、君の情は寧ろ君のために屁とも思はない」

かくなりても元來の黒田、へらず口を叩いて面憎き一文句を残しながら立去る體に、上田も今更ら呆れて無言のまゝの舌鼓を鳴らせど、吉田雄藏は何をか俄に感ぜしが如く、おもむろに振り返りて其後姿じつと見送りぬ、

## 其五

春といふ名は臥龍梅の梢を促せども、柳島の片蔭に餘寒いまだ去りかねて、なほさら草屋の軒深く夜に入りし後、その川上三吉が籠居の門を叩くものあり、折しも耳遠き飯炊の婆は廚にありて呼ぶも遅しと、今は身も心も軽く浮世に馴れたる妻女、そのまゝ立出でて門内より問へば、

「吉田です、雄藏です、御面倒ながら、ちよいと開けて下さい」

もし必要あつて日記を誌せば、日に幾度の廁と箸とる時間まで漏らさず正確に書き入るべきほどの男が、忽然として姿を隠せしより三月越しの今夜、また忽然として訪ひ來し體いかにも深き仔細あるべしと、主人の川上おもはず居坐を直して待てば、やがて入り来る吉田雄藏、傍に一個の風呂敷包を置いて慇懃に頭を垂れぬ、

「やア吉田、どうしたね其後は、久しく來なかつたぢやアないか、は、は、は、しかし相變らず元氣で結構だ、また何處に何をして居っても致々たる勉強力の弛まない點は正に信じて安心して居たさ、おい芳や、菓子でもないかね、兎も角、茶の熱いのを頼むぜ、まさか夕飯前といふ事は無からうな、それとも未だなら遠慮なく喰ふが宜い、此ごろは衛生と經濟の兩刀使ひで四分六の麥飯にして仕舞ツたよ、但し一片の肉は腦を養ふため汽車の石炭に於けるが如く他を節して貯へてあるから、どうだね、喰ひ直さないか、は、は、は、は、」

相も變らず洒々落落たる體に、吉田いよく容を改めながら、

「いや、何とも申譯のないコツて、しかし實は其間に、間違ツたかは知りませんが一事の思慮があツて」

「さうだらう、君としては猶更ら然うあるべき筈だ、つまり取ツて動かざる僕の決心

を泣いて訴ふるが如き上田の情に挿まれて一時、ちよいと立往生した體だツたらうよ、ねエ、ところで今夜また不意に押し掛けて來たなア、もはや僕に關せず上田に關せず、別に君は君たる一個の意見を抱いて來たらしいな」

「や、全く中りました、如何にも其通りです、さう明かに見抜かれた以上は寧ろ訥辯の吉田に取ツて僥倖の事、ぢやア簡單に只その要を搔い抓んで事實の範圍内に演べますが、諸お頼みの材料は其後ますます力を盡して及ぶかぎりの結果、こゝに持參して來ました、ついでには別に一冊の草稿、こりやア師傅にも勝る恩義の川上その人に對する吉田雄藏の苦諫泣争でなく、まづ一個の人物が賭博公開發を世に發表したものと見て、これに對する一個の法學書生が無遠慮に反抗の鋒を向けた論文です、取捨は兎も角、是非とも一覽を願ひたいもんですな」

「面白い、どうせ無人の境を行くやうな容易いコツて無いから、四面楚歌の聲は固よ



に慰むべき妻子なく語るべき友なからしめば竟に憫れむべき寒心すべき結果を來す  
 かも知れないね、ところで其上田に涙を振って苦諫せらるゝ僕の苦しさア實に堪ッ  
 たもんでないよ、無論、僕の今日を以て黒田の墮落と等しく思ッちやア居ないやうだ  
 が、さて事實の示すところは汐入村の骨肉に勝る五人の中より何ぞ圖らん、既に待  
 合の亭主を出し將に賭博師の勸進元を出さんとする彼が苦惱轉輾、倉橋は波濤萬里  
 の外にあり現に餘すところは君たゞ一人だ、願はくは三人に代ッて能く彼を慰藉し  
 てくれよ、もし僕に盡すべき志あらば擧げて彼に盡してくれ、また妙な事をいふ  
 やうだが萬々一、將來に於て、前途その主義と立脚とに於て、たとひ己むを得ざる  
 點より僕や黒田を捨つる事ありとも君、君は倉橋と上田を捨て、くれちやア不可ぜ、  
 情を以て君のためになるものは上田だ、理を以て君のためになるものは倉橋だ、黒  
 田は固より有害無用の一狂漢と見て差支なく、僕は寧ろ由來の關係上それ或は君の

自由を縛する羈絆と見て宜いから、時と場合で君、會釋も遠慮も入らないこつた、  
 一刀兩斷、猛然として取捨を執行するの勇を振ふべしだ、幸ひ君も今は社會に對ッ  
 て獨行獨歩の出来る身體だからなア」

默然として聞き居たる吉田雄藏、病める牛の頭を擡ぐるが如く、しかも眼中に一滴の  
 涙を含んで、川上三吉の面體じつと打守りながら膝を進めぬ、

「どうしても貴兄ア、例の説を貫く決心ですな」

「無論、やッて退ける心算だ」

「なるほど、しかし、吉田雄藏が偏に貴兄のため惜しむところ憾むところ恐るゝところ  
 ろは、説そのものゝ善惡よりも、社會そのものゝ包圍攻撃よりも、一身そのものゝ  
 利害得失よりも、つまり事實の成敗奈何にあるんです、よし説が立ッて社會に肯か  
 れて一身の難關ないにしたところで、今日の我國に於ける人事一切の程度上、果し

「て事實それが行はれるンでせうか」

「いや行はれない、出来ないといふのが衆口一致の確答で、誰が聞いたって狂と笑はずんば愚と憫れむの外は無いさ、しかし古今ともに天下の難しとするところ、いづれも皆これ多くは其時の愚と呼ばれ狂と罵られる奴が道を開いて後、いはゆる一般の才子才物が其道を押し合ッて車馬絡繹の觀を呈するもんだ、まして君これが四角い穴へ丸い棒を箵め込むやうな事でないせ、現に株式市場といひ米穀取引所といひ洋銀相場といひ銀行その他の諸會社に於ける割増法といひ抽籤法といひ物質交換的の必要に應ずる金錢にあらずして金錢そのものが直接に單純に勝敗の運を争ふ賭博公開の一端は事實、盛に大に行はれてるぢやアないか、たゞ其方法手段と名目奈何にあるのみだ、今日ある方面の學者が頻りに唱へる社會主義より貧富平均論より富の分配權限を講ずる一種の經濟論者よりも、寧ろ容易に簡單に實行し得らるべきも

ンと信じてる、なるほど出来ない今から見れば勃然として不意に人心破壊の大兇悪が飛び出したやうな恐慌もあるだらうが、さて出来た曉は君、今まで穀食の口に忽ち肉食の美味と滋養を知ツたやうなもんだよ、は、は、は、いや、つひ興に乗ツて、うかく饒舌り出したが今夜ア斯事に就いて彼はいふ筈ぢやア無かつたね、ところで君、本郷の千駄木といやア随分これから遠い路程だ、宿らないか」

「ありがたう、なアに遠いと言ツても高の知れた道程ですから、ぶらく運動のために歸りませう、また只今の御意見なく面白く感じましたが、兎も角その草稿を見て下さい、まづ差當ツて吉田雄藏が目下の貴兄に對するもの其一冊より外に御坐いません、もし百數十ページの内せめて半ページの文字でも貴兄に首肯して貰やア本望です」

「無論、漫然讀過しない覺悟だ、正に社會の一隅より起ツた有力なる反響として讀む

から、しかし宿れば宜いぢやアないか」

「何まだ九時になりますまい、しかも舊の十二日で月がありますよ」

「なるほど、さうだな、ぢやア近日また来るが宜い、これは別段これとして、ゆツくり遊び旁々、ところで當分その林町の岡本といふ家に居る心算だね」

「さやう、都合に依ると、また元の博士家へ歸るかも知れませんが、其邊の事も近々あらためて伺った時、御相談いたしたく思つて居ります」

「時に、金はあるかな、もう無からう、三月分そのまゝ溜つてるぜ」

「いや、それも近日、戴きに上りませう、まだ四五日の湯錢ぐらゐるはありますから、はゝゝゝゝ」

恥與萬人同、これ會て川上が濱町にありしころ、英雄また別に彫蟲の技ありと戯れ

て一個の桃華石に鐵筆を試みし文字、爾來その落款を用ひ來りしが、今や果して萬人と同じきを恥づるの氣慨こゝに溢れつゝ、もし一步を誤れば萬人と異なるがために一身を賭せんとするの境に至れり、たとひ説は人行はるゝとも事實は世に行はるゝの難きを奈何にせん、あゝ我ための師傅に等しき恩人をして竟に包圍攻撃の罵倒中に葬らしむるの憾を見るかと、吉田雄藏おもはず一種悲愴の感に打たれながら、柳島を立出でしは九時頃、いまだ夜は更けざれど本所の果の場末に人影もなく、やうく森の梢に上りし月は見渡す空の半面を照らして、妙見堂に聞ゆる鉦の音いと物淋し、

歸途の足ついでに上田の許へ立寄りんとせしが、愛らしき我子の寢顔に夫婦もろとも暫しの浮世を忘るゝ中へ、また入らざる事を聞かさんも忍びぬ業と、そのまゝ本所の割下水を横ぎりて吾妻橋を渡り、こゝばかりは晝夜を分たぬ淺草の繁華雑沓を見返りながら、上野の森影に出でて池の端より根津の権現に至るまでの間、わづかの道にも走

馬燈に等しき冷熱雅俗の相違ありと思へば、人事の窮達消長また怪しむに足らずと、我を追ふが如く迎ふが如き月を仰いで一種いふべからざるの感を興しぬ、やがて林町に今の我境涯を包める假の宿、その門口に立寄りて静に戸を叩けば、まだ寝もやらぬ體に内より答へしは女主と思ひの外、きなれぬ艶を含みし小聲に、吉田雄藏おもはず耳を敬て、はつと容を改めぬ、されど戸を開けて我を迎へしは正しく四十女の主人、いつもながらの笑顔に言葉さへ輕し、

「おや吉田さん、よくまア貴君お歸りでしたね、もう十二時ですから、迎も今夜は、と思つて居りましたよ、ほゝゝゝ」と  
 「いや、今ごろ舞ひ戻つて来て、お氣の毒です、わざく僕のために起きて居て下さつたんでせうな、恐縮々々」

「何さうでも御坐いませんよ、晝間お出かけの時に門口で、ちよいと御目にかゝつた彼、娘が歸つて来たもんですから、つい久しぶりで今まで、お春や、その火鉢の傍にあるランプへ火を點けておあげよ」  
 「なアに宜しい、自分で點けますから」  
 あけし門の戸を閉め終るまで、何とやら流石その身一人が先立ちかねつゝ、やうく女主と共に入りて娘を見れば、宛然これ浮世畫の名筆に描き出せる一幅の處女、幾度か擦れど火の出ぬマッチに其顔まづ火の如く赤めながら、眉を顰めて大前髪の額越しに母を見上げたる眼元は露の滴るに似たり、  
 「あれ、無器用な子だね、何をしてるんだよ」  
 「だつて此、此マッチが不可ないんですもの」  
 「ほゝゝゝマッチに口があつたら不足をいひますよ、さア火は母が點けるから和女、

まづ御挨拶をしないか、吉田さん、これが娘で春と申します、不束なもので御坐います、何卒お心易く」

いはれて其まゝの無言に慇懃の挨拶振、わづかの月日なれど屋敷奉公せし身の何とやら崩さぬ自然の風儀を備へぬ、

吉田雄藏また慇懃の會釋もろとも、

「去年の冬から大變お世話になつて居ます、時に女主人、もう十二時を過ぎましたね、ぢやア此まゝ直と寝込みませうよ」

「まア吉田さん、お茶でも一啜めし上つて」

「いや、あんまり歩き過ぎた故か少々草臥れて居ますから、また明朝」

「草臥れて在らつしやれば猶更ら貴君、お氣が休まりますよ、お春その間に和女そのランプを二階へ持つておいで」

心のうちには聊か面倒と思へど、眼前に辭しかねて其まゝ其處に坐せば、わざと購求めしか娘が持ち歸りしか、ことし十三といふ男の子さへあるに、まだ手も付けぬ菓子折を開いて茶を進めながら、

「さア吉田さん御遠慮なく召し上つて下さい、しかし今日は何處へ、妾どもへ入らしつてから半日がけに夜の十二時までには、お珍らしい、始めてのこつて御坐いますねエ、あの御兄様、ほゝゝゝとんでもない失禮を致しました彼方と御同伴でしたの」

「はゝゝゝ、無口者の饒舌と一般、常に死んだか生きたか分らないやうに閉ぢ籠つて居る奴が、たまゝ出りやア絲目の切れた奴風で何處まで飛ぶか知れませんよ、ところで女主人、今日は大變お氣の毒な間違ひをさせましたね、ありやア上田と言つて、つまり兄に等しい恩のある古い友達で、外貌に似合はない心の優しい男で、何とも思つちやア居ませんさ、また今後、ちよいとやつて来るかも知れませんが、どう



か氣にかけずに居ッて下さい」

「なアに貴君、氣にかけるどころですか、手前こそ初見の方に申譯もない失策を致しまして、ほ、ほ、ほ、しかし随分、大きい方ですね、なるほど、あ、いふ方が却ッて御氣性の柔和なものですよ、ねエ」

「身材が五尺八寸強、丸裸で二十貫目を缺けた事なしといふ厄介な荷物ですが、あれで情に迫ると小兒のやうに泣きますよ、は、は、は、類は友で妙な奴には妙な奴が氣の合ッたもんでね」

おもはず笑ひながら何心なく振り返れば、わが背後に隔てられて薄闇き片隅に身を縮めたる娘の風情、

「や、こりやア失敬しました、いづれ明朝また、御免下さいよ」

そのまゝ遁ぐるが如く二階の一室へ驅け上れば、はや既に夜具を取展べて、机の上な

るランプの灯影ほつと主なき枕頭を照らしぬ、

山を出でてより滿十年、いまだ曾て自己の臥房を他手にかけてし事なく、またこの二階に借住居してよりも今日が始めての事と思へば、我肌に着馴れて我夢を包みし我夜着なれど、何とやら俄に改りたる心地、枕頭の階下に母子が私語く聲も寢耳に立ちて八重の汐路の終夜、舟底に打寄する浪の音を聞くが如し、

東天の鴉に夢を破られ軒端の雀に枕を笑はれし事なき吉田雄藏も、ゆうべ寢られぬままの曉方、とろくと一睡の後に目を覺せば、いつしか戸の隙間より旭日さし入りて我半面を射るのみか、折しも階下より娘が忍び足、そつと枕頭へ今朝の新聞を持ち來りし體に、心弱くも狸寢入の空齋、あ、咄この一癡漢、そもく何のためぞと勇を鼓して兩眼くわツと見開けば、はや敵は去ッて影なし、

雄藏おもはず蛇の鎌首に等しく頭を持ち上げて、四邊を見廻しつゝ冷かに浮べし片頬の笑は我みづから我を嘲りし體、そのまゝ跳ね起きて褻衣を脱ぎ替へ夜具を取方付けし後、何氣なく階下に降り行けば、

「おや吉田さん今朝は平生にない事、御寛體で御坐いましたね、お春や其お嗽水を取つてから此お膳を出すんだよ」

「いや女主人、そんな事をされちやア困るよ、自分の勝手にするから」

「なアに貴君、どうせ遊んで居りますもの、御遠慮なく使つて戴く方が身のためで御坐います、實は都合上お屋敷を下けまして今日から當分まづ手許に置く心算ですから、猶更お心易く」

「なるほど、しかし僕の用をして貰つちやア困りますよ、まして書生は書生で別に自分の境涯に應じた一個の風習といふものがありますからねエ、第一この二階を借り

た時の約束が」

「あらまア吉田さん今ごろ何ですよ、そんな事を仰しやツて、兎も角お嗽水が取つて御坐いますから、お小言は後で伺ひませう、ほゝゝゝお固いにも程度のおつたもんです」

「困る、どうも困りますな、かう困らされちやア實際、全く困りますよ」

「何だか私ども母子で貴君お一人を窘めるやうに聞えますね、ほゝゝゝ」

「いや窘められるより却つて辛いです」

「さう貴君お困りなんですか、それではね、お春や、あんまりお困りにならないやう、なるべく氣を付けて宜い加減に困らせておあけよ、ほゝゝゝ」

## 其六

いかに猪猿を相手の山また山の奥に生れたればとて、いかに喰ふや喰はずの五人もろとも膝小僧抱き寝の境涯を経ればとて、いかに三尺の學意を天地として校外一步を吹きぬく浮世の塵に染まざればとて、いかに其性の謹嚴寡黙にして身を守ること固く志を抱くこと大なればとて、吉田雄藏こゝに二十六の曉、美人を見れば正しく眼に美人と見るべく、その優しき情に逢へば正しく心に嬉しかるべく、主なき春の名花一輪さらに露を含んで我ために彌増す色香いよく深ければ、これを一個の肉塊物として無意味の間に葬り去る事ますます難かるべし、されど世の中に美人の数は一人にあらずして世の中に我は只これ一人なり、まして二十六の今この時期は我一身に再び来るべからず、つまりは我より外になき我一身を數ある美人のために投じ再び來らざる今この時期を今に限らぬ戀のために失せん事、五より二を引いて三を答ふる如く小學校の生徒に問うても利害の數を誤らざるべし、さ

るを何ぞや苦學十年の丈夫兒そもく愚の極と、吉田雄藏おもはず兩の拳をあけて机を叩けば、硯が踊つて自己の満面に墨痕淋漓、やア仕舞つたと叫ぶ聲に階下より娘の春が上り來て、

「おやまア、どうなさいましたの其お顔は、ほゝゝゝあら、お袖で、いけませんよ、すぐ今お手拭と水を持つてまゐりますから」

あゝ去るべし、あゝ去るべし、去るに如かず、去るより外に策も力もなし、小學校の生徒も忽ち言下に答へ得べき簡單の數と思ひしに、何ぞ圖らん古今の大學者が首骨を折り並べても容易に知るべからざる道理の外と、人知れぬ舌を巻いて今更の不思議に驚きぬ、

さるにても山家生育の我、いづこ都人士の風を帯びたる、見るが如くに生れし我容

貌、いづこに眉目清秀の形を備へたる、前途の志ありとはいへ今は斯くの境涯、何として婦女子の意を惹くべき、取ツて動かざる一片の主義ありとも所謂の當世の才子才物にあらざる斯くの狀態、そもく、いづこに何の趣味を求むべき、華奢風流を解せざるの一書生、艶冶綺語を知らざるの野暮漢、またこれ道理の外の不思議に捕へられたるかと思へば、油斷大敵いよく、以て怖ろし、

あり餘る世帯ならねど、用の外に出歩かねば、さして其日の浮世にも追ひ詰められぬほどの内證、こつそりと四十後家の女主人に十七の娘と十三の弟、母子三人が水入らずの朝夕を無事に保ちて、空ふく世間の雨にも風にも當らず、おのが羽翼の分を知る小鳥の葉蔭に棲むが如し、今を盛に荒れ廻る弟は學校に通うて、猶更ら靜閑なる縁端の障子を明け放ちつゝ、い

つしか春めきし軒の日影に氣を誘はれながら、どこの物見遊山に出るでは無く、わづかの庭に萌え出でし小草の色に心を慰めて、これも浮世を渡る片手業、をり／＼針の糸目を休めて物語りぬ、

「ねエ、おツ母さん、妾も斯な着物が欲しい事ね、どういふ女が着るんでせう」。

「氣樂な事ばかり言ふよ、呉服屋が出入して和女そんな物が絶えず着られるやうな身分なら、人の仕立物なんかしないさ、しかし人間の運といふものは分らないから、いくら此着物を常着にする女だつて、また木綿の洗濯物を晴着にしないとも限らないのいし、和女だつて運と心掛次第で人に仕立物をするやうになれないとも限らないのが世の中だよ、わけて女は其身の伶俐ばかりで世が渡れないんだから、どうせ持つ御亭主が肝要だよ、男が好くつても金があつても馬鹿ぢやア末が覺束なし、また腕があつても身持が悪けりやア仕方がなし、つまり二階の、あの吉田さんのやうに

學問があつて氣立が優しくツツ沈着いて口数の少い腹の底の確固な方が眞實の男だよ、だから和女も其氣で如才なく、しツかりしないと不可ないよ、年ごろの娘を持つた母の氣は和女どれほど苦勞するものか、寢た間も惘然して居ないんだよ、母なんかは和女の年に、お嫁入して來たんだからねエ」

「あら、おツ母さん、いやな事を、ほゝゝゝ」

「何が呵しいもんかね、眞實の事さ、十七といへば和女、もう男の大人も同然だものうかくいつまで小兒で居られるもんで無いよ、はやく吉田さんのやうな末の見込のある方を御亭主に持つて、母に安心さしておくれ」

「大變おツ母さんは吉田さん最良です事ね、さう吉田さんは偉い方なんですか、あれで」

「あれでとは和女、何をいふんだね、失禮な、あれが取も直さず偉い方なんだよ、今の時の書生さんを御覽、ろくに學問も出來ないくせに僅な事を鼻にかけて、いやに行き過ぎた生意氣な口ばかり達者で、しかも虚飾家で虚言家で薄情で放蕩で、箸にも棒にもかゝらない人達が多いぢやアないか」

「ほんたうですよ、おツ母さん、さういへば現に一人、そんな人が小石川のお屋敷にも居りましたの、井出さんといふ名で實は奥様の甥に當る方ですから、外の書生さんとは違つて萬事、丁寧にするほど威張り返つてさ、其上、いやに粧飾して變な氣觸な事ばかりいふ人ですよ、旦那様も奥様も好い方で御奉公の爲善い割に幾人お小間使が來ても續かないのは、その井出さんといふ人が居るからださうです、妾だつて、井出さんさへ居なければ、達て、お暇を取りたくも無いんですが、何か薄氣味が悪くツツ」

「それ御覽、そんな人が多いんだよ、和女も早くお暇を戴いて宜かつた、もし萬一の

事でもあつた時は、あとで悔んでも取返しにならないからねエ、とかく生んだ母の見立てた人が大丈夫だよ」

「ほ、ほ、ほ、おッ母さんは、まるで物が取極つたやうな事を、ほ、ほ、ほ、また、どツか外へ御奉公に上つても宜いんですよ、妾は」

「餘計な事をいはずと黙つて家にお居で、出して宜くば母が出します」

「だから、無理に出たいとも何とも、いつた理由で無いんですよ、たゞ出ても宜いと  
思つてさ」

「思はなくつても宜しい、何事も母の指圖通りにさへすれば、それで宜いんだよ和女は、子のために悪く思ふ母が何處にあるもんかね、よく考へて御覽な」

我知らず互に針の手を止めて、隔てぬ母子が思ひ思はるゝ心と心、つい口頭に打解け過ぎて顔を見合はす折しも、俄に人車の轆棒を卸せし音、やがて門口の格子戸がらゝ

と開いて、正しく男の聲、

「たのむ、たのむ」

立ちかけし母よりも娘の身は軽く、そのまゝ出でし障子の外、おやといふ聲もろとも、また忽ち物に追はるゝ如く入り来りて眉うち蹙めながら耳に口、

「おッ母さん、どうしませう、今いうた其、その井出さんといふ氣觸な人が、いやですよ妾、二階へでも隠れませうか」

きくや否、母親おもはず小首を傾けて膝立直しつゝ、

「仕方がないから此處へ、今更ら隠れたりすると却つて悪いよ、まア兎も角、どんな用か、母が、和女は黙つてるんだよ」

娘に代りて母親が立出でつゝ、迎へ入れし男は見れば、のツペりとした色白の二十三四、遠目に大島ながら近寄れば米澤紬の二枚袷を重ねて、吹けば飛ぶやうなる軽き魚

子の五所紋、薄色縮緬の襦袢の袖口ちらく、女物の片側を仕立て直せしかと思はるる襦珍織の角帯に怪しき金色の鎖を巻さ付きて、わざと時計は山の端を出し三分一の月形に現しつゝ、片手に香水を含みし絹のハンカチーフを丸めて放さず、片手は常に懐中のまゝぬつとした容體、膝を斜めに身を反し唇端を結んで横目を使ひ、てかくと摺り磨いたる額際を春の日影に照らして、煙草盆はありながら葉巻でもない紙の細巻に蠟マツチの火を摺り出し、折角の茶も一目じろりと見たばかり、これで物いはねば猶まだしもなれど、變な調子に嫌な呼吸の色氣が溢れて、寸隙があれば端唄の一節も呻りたいといふ難物、あゝ何が因果で態と斯んな男になりたいやら、元來の生質は世間の十人並、丸裸で寢惚けた面が却つて見好いかと思はれぬ、

「やア、これは始めて、おッ母さんですか、小石川の井出といふもんです、定めて春さんから萬々お聞き及びでせうが、はゝゝゝちよいと今日は團子阪まで来た用が

ありましたから、ついでに」

「それは、恐れ入ります、よくまアかやうな見苦しいところへ、また改めて申し上げるも何で御坐いますが、不束なものを、いろゝお世話になりました」

「なアに世話どころか、此方が却つて迷惑をかけたかも知れないさ、はゝゝゝしかし春さん、どうしたもんだね、唐突に歸りつきりは少々、酷いよ、しかし何かおめでたい下用意とでもいふやうな理由かね、はゝゝゝ」

「いえ貴君、どう致しまして、御覽の通りの身分で、たゞ妾の手助けに、お屋敷の御都合も伺ひませす不意に御暇を戴きまして何とも申譯は御坐いませんが、娘が歸りました翌日、すぐ最初の世話いたしてくれました人を差上げて、委細お願い申し上げた筈で、また外に御奉公人も澤山、これ一人で差當つての御用も缺けまいかと、自分勝手な事ばかり考へまして、はゝゝゝ」

「いや、世話人が暇を取りに来た事も知ツてるがね、あんまり不意だから、實ア變に思ツてさ、第一、家内中の者が皆、惜しんで居るよ、しかし親許の都合とありやア仕方が無いさ、ねエ、ところで、そんな事は儲置いて、どうだね、今日ぢやア無いが、一日、どツか花見にでも出かけませうかな、無論おツ母さんも同伴だよ、また外に其方の連があつても宜いさ、なるべくは少しぐらゐる遠出してね、いやもう時候が時候だから毎日々々友達に責められて蒼蠅いほど誘はれるが、さて理窟ッほい連中ぢやア、さらに面白くないよ、たゞ此方が旗頭に立てられて軍用金を仰せ付かるばかりだからなア、はッはッはッはッ」

「御身分がら嘸まア、いろんな人達が御無理を願ツて出る事で御坐いませう、妾どもも僥倖お言葉に甘へて、お供を致したう存じますが、何分、かやうな餘所様の仕立物に追はれまして、第一また晴がましい物見遊山の衆中へ貴君、身の支度も出来な

いものが、お顔の広い方は猶更の事、其お顔を潰すやうな理由にもなりますから、はゝゝゝ」

「や、そりやア少々、聊か聞えない御辭退と謂ふべしだね、何も衣裳や帯を見せに行くんぢやアなし、花を見に行くのさ、しかも其花が恥ぢて凋むほどの美貌に衣裳も帯も入るもんか、是非そのまゝ、却ツて常着のまゝが宜い、どうだ皆よく見ろ、飾らなくツて此くらゐといふところが生命さ、片寄れくゞ双物なしの人殺し、これで御坐いと大勢の中を割ツて通りたいもんだ、はゝゝゝしかし戲談は儲置いて近日のうち」

「はい、有難うは御坐いますが、只今も申し上げました通りの理由で」

「さアその理由も絲瓜も入らないぢやアないか、つい手軽く、ちよいとねエ、春さる日は兎も角、まア行くと極めるさ」



「いえ、そんな事は、妾の料簡で極められませんから、また花なんか見たくも御坐  
いませんわ」

「あれ、この子は失禮な御挨拶をするよ、折角あゝ仰しやるんだもの、お供は出来な  
いにしても、お謝絶の爲やうがあつたもんだに、貴君この通りの我まゝで御坐います  
から、ほゝゝゝしかし和女、ちよいと御免を蒙つて、お二階の火鉢に火でも消え  
てないか鐵瓶のお湯でも冷めてないか、よく見ておいで、此方で氣を付けてあけな  
いと何とも仰しやらない方だから、さア早くよ」

階下には胸が痛むほど嫌で居られず、二階へは何とやら顔が赤らむほど氣が咎めて上  
れず、さりとて今は上と下との境に身を置き兼ねつゝ、そのまゝ上り行く後姿を、じ  
ろりと横眼の額越に睨みあけて、おもはぬ旋風に掌中の物を吹き取られし體、我知ら  
ず膝を進めながら、

「この二階に誰か、人が居るんですかね」

「はい、近ごろ、ちよいと、妾どもの都合上、借りて戴いた方が御坐いました」

「むゝそりやア淋しくなくって宜いでせう、全體どういふ人ですな」

「やはり貴君、まだお若い、書生さんで、たしか今年、二十六とか仰しやいました  
が」

「はゝア書生が、どこの學校へ通ツてる書生です」

「いえ、別段、どこへも、たゞ家で御勉強ばかりなすツてる方で」

「そいつア少々、變だな、これといふ極ツた學校へも通はない此頃の書生にやア、隨  
分、油斷のならない、風の悪い奴があるから、わけて女世帯の素人家を探し歩いて、  
づう／＼しく錨を卸すやうな奴ア、得て一物のあるもんだから、うツかりすると狸  
の御宿申せし恐れありだ、はゝゝゝ」

「お心付け有難うは御坐いますが、決して、さやうな方では」

「その決してが大に決してで無いやうな結果になるモンでね、兎に角、用心に如くはなし、火の元の御用心々々々、は、は、は、時に便所は何處ですな、ちよいと借りたい、何、案内に及ばず、つい指頭で、なるほど、あれだな」

二階には吉田雄藏たゞ一人、默然として木像の如く机に對ひながら、五六冊の書物を開いたまゝの左に積み重ねて右には筆を執りつゝ、何をか起稿の體、をりしも音なく上り来て火鉢を見れば、生憎に火もあり鐵瓶の湯もありて、しよんほり手持無沙汰に起ちも得やらす坐しもせぬ恥づかし氣の風情を、雄藏おもむろに見返りて、

「よろしいよ、かまはずに置いて下さい、煙草も茶も入らない人間だから」

「それでも吉田さん、お茶ぐらゐる貴君、ちよいと入れて差上げませうか」

「いや、それに及びません、咽喉が乾けば湯で結構、は、は、は、厄介のない代り愛敬の

ない奴ですよ、どうか階下へ、お客があるんでせう」

「いえ、お客ぢや御坐いませんの、いやな人で、側に居るのが何より辛いモンですか、ら、つい、お邪魔に、あの吉田さん箒を倒さに立てると早く歸るやうに言ひますが、眞實でせうかね」

「さア、どうですか、困った問題ですな、しかし事實そんな馬鹿けた理由が無いでせうよ、は、は、は、」

「ぢやア貴君、どうしたら早く歸りませう、實は、おツ母さんも大變、迷惑して居りますから」

「む、なるほど、さういふ筋の客ですか、いや、お察し申します、しかし僕が立入つて横合から物をいふも變ですな、もし萬一、いよくお困りの場合には、役に立たないながら随分、そりやア出て談話をして宜いですがね、さういふ事に法學生は

却ッて、いけませんよ、理窟ばかり先に立ッて」

「何あんな人は、理窟でも何でも早く追ひ歸して戴く方が」

「いや、それにしても結果、事實が物いふ奴ですから、あまり感情を害すると此方の不利益を急ぐやうな理由で、しかし、お困りですな」

「全く困りますよ、妾は黙ッて傍で聞いて居るばかりですが、猶更ら辛くッて、辛くッて、どうしようかと思ひますの」

「ぢやア斯うしませう、僕が便所へでも行くやうな風をして、ちよいと何氣なしに降ります、ね、そこで、おッ母さんが何とか言へば、幸ひ其場の都合で、また何とか口の出しやうもありますから、兎角さういふ相手を怒らして仕舞ッちやア不可ませんよ」

「さうですなエ、あんな押の強い、づうくしい人を怒らして仕舞ッては、何を仕出

すか却ッて後が面倒で御坐いますから」

「その通りです、まア降りて見ませう」

吉田雄藏そのまゝ、起ッて靜に梯子段を降り行きつゝ、脇目も觸らぬ慇懃の會釋もろとも便所に入り、やがて出で來りて手を洗ひながら、外貌に似合はぬ奴と始めて客の面じろりと打守れば客も此奴かと吉田の面體じろり睨み返しぬ、

女主は思はず膝を寬めて振り返りながら、顰める眉を俄に打開きつゝ、

「吉田さん今朝から少しも降りて入らッしやいません事ね、あまり御精が出過ぎます

よ、ちと貴君お談話なさいました」

「ありがたう、しかし、まだ早いでせう晝飯には、第一お客が」

「いえ、かまはないと申しては甚だ恐れ入りますか、大變お捌けなすッた方ですからまた妾のやうなものが御相手いたして居ッても、やはり、殿方は殿方同士で、おや

お春は二階へ上ツたま、何をして居ますか、あゝいふ我まゝな勝手もんで御坐いま  
すよ、ほゝゝゝさア吉田さん兎も角、こちらへ」  
現在おのれが事を眼前に譏られても、そのまま黙然として見返りもせぬ筈の男ながら、  
軽く首肯いて座に着きつゝ、

「こりやア始めまして、失禮ですが女主人、どちらの方です」

「はい、あのウ何で御坐いますよ、お春か過日まで御奉公して居ツた其お屋敷の方で  
實は妾も今日、初めて御目にかゝりますの」

「はてな、ぢやアこれまで別段、何も、どう斯うといふ關係のない方ですな」

おもはず眉を打寄せ小首を傾けて、何とやら俄に拍子ぬけたる體を、身は眞正面に對  
ひながら目は横に冷かなる一種の微笑もろとも、

「僕は井出といふもんですが、何か御不審のこツてもありますかね、どうも變ですな、

君の言葉ア、これまで關係があるとか、無いかとか、はゝゝゝまるで當家の主人  
公然たりだ、但し養子にでもならうといふ、いや、既に、なツた覺悟ですかね、き  
くところぢやア君まだ少し早いよ、何をする何處の書生かア知らないが、ほんの只  
の二階を借りてるといふ事だけは聞いたさ、そいつが君、御大層に、はッはッはッ

はッ

藤葛を腰帶にして山家生育の骨太に生れたる吉田雄藏、いざとなれば下手な春畫草紙  
の殿様めいたる奴を一疋、とツて捻ぢ伏せんこと豆を顛がすよりも易けれど、人の言  
葉尻を捉へて無用の爭論する男ならねば、たゞ自己が見當違ひに恥ぢて其まゝ、すツと  
座を起つや否、失敬の一語を残して遁ぐるが如く二階へ駆け上りぬ、

井出は懐手のまゝ例の上目いよく冷かに、ふんと鼻頭の笑を軽く肩に譲りて、  
「何だ、ありやア、廉ッほい花火線香のやうに、しゆツと消え際の脆さ加減が呵しい

よ、は、は、いや、しかし思つたよりは人の悪く無ささうな奴さ、こいつア叶はな  
いと見るや否、すぐ遁け出したところが正直だね、まア安心して置いてやんなさい、  
は、は、は、とここで今日は何か變な調子だ、あんまり長居しても妙で無からう、  
ぢやアまた其うち、雲がくれの春さんに宜しく」

「どうも貴君 とんだ失禮ばかり致しまして、何の、お愛想も」

「なアに今日は先づ今日の幕として置いてさ、今度また來た時お愛想をして戴かうよ、  
は、は、は、」

病魔を送り出せし如く、ほつと息して其まゝ二階へ上り見れば、お春は此方の窓に身  
を凭せて何とやら打沈む體、吉田は彼方の机に向うて無言のまゝに讀書の體、

「和女そこに何をしてるの」

「おッ母さん、とんだ事をしましたよ、吉田さんに謝つて下さいな」

「おや、何また和女、失禮な事をしたんだよ、あの吉田さん、只今は、どうも變な人  
で、嘸お困りで御坐いましたらう、また春が何か、お氣に觸るやうな事でも致しま  
したのですか」

「いや、全く僕が悪いのさ、實ア今の客ね、あれを妙な工合に考へて、は、は、は、お  
春さんが二階へ來て、頻りに困るゝといふ其、困り方が如何にも、それらしかッ  
たから、甚だ失敬な理由だが、何か催促がましい事で動かない奴と思つたのが間違  
ひの原因さ、しかし場合に依ッちやア口を出さうと思つたのが猶更の大間違ひ、い  
やはや、面目次第も無いこッて、はふゝの體に遁け出しましたよ、は、は、は、  
恰度女主人が過日あの上田を兄と間違つたやうなもンさ、つまり復仇をされたんだ  
な、は、は、は、」

「あら、さうですか、道理で、實は變だと思ひましたよ、ずつと降りて入らしつた工

合から、始めての人に貴君が、ほ、ほ、ほ、しかし和女よく氣を付けて物を言はないと不可ないよ、相手が相手で吉田さんが斯ういふ御氣性の方だから宜いやうなもの、もし外の人だったら兩方へ御迷惑かけて、それこそ大變な事になるよ、ですがね吉田さん、おかけで助かりました事、まア貴君、あの氣觸な、忌みツたらしい風で、づうくしく坐り込まれて、いろんな事を言はれたには實に閉口いたしましたよ、一時は貴君、どうしようかと思つて、お春が御奉公した家の人だといふから、まさか追ひ出す事も出来ませぬね」

「しかし僕が降りて往つて、不意に妙な事を言つたから、定めて怒つたまゝ歸つたんでせうな、考へて見ると氣の毒な事をしましたわい」

「何、貴君、氣の毒なモンですか、よし怒つたつても宜しう御坐いますよ、却つて此方が助かりますから、ねエお春」

「眞實ですよ、おツ母さん あんな嫌な人が、いくら怒つたつて、どうしたつて、もし今度また来るやうな事があつたら、其時こそ妾が出て、門口から歸つて貰ひますワ、おツ母さんが今日あんまり遠慮なさり過ぎるもんだから、宜い氣になつて、あお押の強い事ばかり言ひ出すんですよ、傍で聞いて居ても、自烈つたくつて自烈つたくつて」

「ほ、ほ、ほ、和女まア大變、急に強くなつた事ね」

「なに最初から、さう思つて居たんですが、妾に物を言つちやア不可ないくと、無理に黙らされたモンですから、つひ、吉田さんまで御迷惑をかけるやうになつたんですよ」

「ほ、ほ、ほ、まるで母一人が悪いんだね、ぢやア吉田さんにも母一人で謝つて置きませう」

「いえ、そりやア妾も、謝りますがね、大體おツ母さんが、あんな人に丁寧過ぎたからですよ」

「はい、以後は氣を付けて、なるべく心得ませう、ほ、ほ、ほ」  
 母子が無邪氣の争ひを背後に聞きながら、壁に對ひ机によりて見返りもせぬ吉田雄藏、また例の木像かと思へば此木像いつしか名作の不思議を現して、何とやら眉目の間に一種いふべからざる苦笑ひを呈しぬ、

## 其七

元來の容貌に於て眼前の境涯に於て、また自然の性に於て利害の數に於て、そもくこの我を何の見るところかある、もし見るところありとせば唯それ不言不語の我宿志にあるのみ、苟も有形の外に取らずして無形の内に取るは堂々たる知名の士と雖も猶

かつ難しとするところ、さるを母子が斯くまで我に盡すの情緒纏綿、おもへば我宿志を遮るべき戀は身を削るの斧にあらずして、寧ろ或は我宿志を助くべき愛は身を養ふの露なるべき乎、

曉の鐘に耳を欬て、將に起き出でんとするの時、夜更け人定まりて枕に就かんとするの時、流石の吉田雄藏も幾度か睡りかねつゝ、起きかねつゝ、おもはず天井の節穴を數へ無心の壁に問うて人知れぬ心に迷ひしが、また忽ち猛然として現じ出す一個の木強漢、あゝ去るべし去るべし去るべし、

終夜ら睡りもやらで机に對ひし其まゝの曉を待つて家を飛び出し、團子阪より谷中へ經て上野の山内を巡りながら、やうく八時ごろに立歸つて朝飯の箸を措くや否、およそ二時間あまりも二階の片隅に閉ぢ籠りしが、また十時ごろに立出でて例の健脚、

兩國の上田が許を訪へば、生憎の不在なれど妻女が勧めに晝飯を終りし後、さらに柳島の川上が許を訪ひしに、これまた不在と聞いて何をか鉛筆の一書を残しながら、草臥れたる顔色もなき足早に根津の権現横町まで歸り來りし頃は、はや夕暮の空近く春の夕陽は森の彼方に沈みかゝりぬ、折しも後より駈け來つて我脊に突き當りしもの、はつと思はず蹠踏きながら振り返れば、壯士めいたる二十四五の一書生、大のステツキを取直しながら、

「おい君、なぜ僕に突き當つた、さア許さんぞ此奴、返答次第でステツキが飛ぶから覺悟しろ、貴様ア全體どこのもんだ」

流石の吉田も今は堪へ兼ねし憤怒の顔色、我を忘れて拳を握りし折しも、また背後より三四人の書生、どやくと一時に現れて、

「何を何、どうした、この野郎か、怪しからん奴だ」

それと叫ぶ聲もろとも、忽ち四方を取圍んで鐵拳雨の如し、平生は睡るに似たる温順の吉田雄藏ながら、元來は猪猿を相手の山家生育、しかも二十六の今日まで醫藥の何物たるを知らざる筋骨健全に思ひの外の力量を備へて、のっそりと音なき其性の不屈不撓は牛の如き男、もはや叶はぬ絶體絶命と見るや否、滿面に血氣を帯びて俄に荒れ出せし猛牛の勢ひ、無言のまゝに一步も退かず摺んで蹴つて前後左右に跳ね飛ばせば、かゝる奴原の常慣、ばらくと今更に驚いて木葉の如く四方へ遁け散りぬ、

吉田雄藏、ほつと大息を吐きながら、なほ残る憤怒の眼を見張つて睨めども、はや敵は逃げ去つたり四邊は夕暮の空に人の山、しかも見物の中より小兒の聲として、やア斬られたと叫ぶを聞くや否、その身を遁ぐるが如く立去つて、足早に歩みつゝ片手に顔を撫で下せば、べつとりと掌に含みし血汐は糊の如し、



南無三寶、下駄と拳とステツキばかりと思ひの外、き、及ぶ悪書生の大ナイフ、さては刃物を持ちし奴が居りしか、そもく我この東京に出でしより十年の間、孤影みづから守りて無口に過ぎたる事はありとも、交りて誰一人に何の怨恨を含まれし覚えもなく、まして無頼の壯士めいたる墮落書生に一點の恩仇あるべき筈もなき我を、過誤か悪戯か人違ひかと、まだ残る無念の拳に流る、血汐を押へながら指を伸ばして探れば、毛の中より左の額際に餘りて冷りと二三寸の斬疵、また今更に歩を停めて驚きぬ、

わづか天井板一枚を隔て、六疊一室の二階にありながら、ことし二十六の男が鼠一疋の梁を傳ふ音もなく、ひっそりと閉ぢ籠りて机に對ひしまゝ木像の如くなれど、たまたま出るといへば朝より夜に入るまで健脚にまかして何處を駆け廻るやら、飾らぬうちの凛々しい風俗といひ、無口のうちに現る、氣立といひ、さても尋常の人には出來

ぬ事と、互の心に首肯き合うたる母子の物語、折しも柱時計を見れば、まだ宵と思ひの外に九時を過ぎぬ、

「ねエお春や、今のうち二階の寢床を取って置いておあけよ、机の前に觸らないやう、また歸つて来て御勉強なされるかも知れないから」

「だって、おッ母さん、そんな事をして置くと却つて嫌な顔をなさるよ、あの吉田さんには」

「いくら何と仰しやつても、さうして置くもんだよ、あゝいふ方には吐られても和女するだけの事をして置けば、きつと身の爲になるからさ、他人の事ぢやア無いよ」

「それでは、もし何とか仰しやれば、おッ母さんだといひますよ」  
「ほゝゝゝ宜いとも、しかし遅い事ね、今朝お出かけには夕方までに歸ると、聞いたにねエ」

「おや、あの聲音は吉田さんですよ、あれ、憎らしい、違つたこと、まア何處を歩いてなさるんでせう一日もかゝつて」

「そりやア和女、御用の都合さ、あの通り少しも平生に出ない方だから、どうせ出れば一日ぐらゐる」

「何の御用なんでせう、同じ家に居てさへ黙つて物を仰しやらない方が、わざ／＼出歩いて朝から晩まで」

「ほゝゝゝ、何の御用か分るもんかね、呵しい事をいふ子だよ、いつまで小兒のやうに、ほゝゝゝ、」

折しも聲音さへなく歸り來りて、靜に門の戸を引き開けし吉田雄藏、見れば半面まツ白に繻帶を施して、右の片目ばかり輝くばかりに光りしのみか、顔色は青く衣服は引き裂かれて、しかも例の潔癖とて肌着に白地の浴衣を放さねば、その襟の邊に際立つ

血汐の痕、なま／＼しき體を見るより母子もろとも一時に驚いて、あツと呆れぬ、

「いや、心配して下さるに及ばんです、つい途中で、つまらない怪我をしたもんだから幸ひ近處の醫者へ駆け込んで、うまく遣つて貰ひましたよ、どうか氣の毒ですがね、鐵瓶に湯を入れて鹽か梅干と一緒に持つて來て下さいな」

いひつゝ其まゝ脇目も觸らず靜に二階へ上り行きぬ、

一目ちらと見てさへ尋常の疵とも思はぬに、ましてランプの火に照り返されし一入の物凄さ、母子は言葉もなく顔見合はせて呆れしが、流石に年甲斐の母親まづ鐵瓶を提げて娘は梅干と燒鹽を盆に載せつゝ、うち震ふ足下踏み占めながら二階へ上り見れば、吉田雄藏、机に片腕を凭せ片手に頭を押へたるまゝ默然と坐しぬ、

「まア貴君、吉田さん、どうなさいましたの」

「なアに、大した事はありませんがね、ちよいと疵が頭の方へかゝつたもんだから、

少々ばかり熱が出たやうですよ、しかしそれも症の知れたこつて、たゞ一時の堪忍さへすりやア別段、兎も角その湯に鹽を入れて下さい、何だか咽喉が乾いて、や、また寐床を展べて貰ったな」

「あれ、何ですよ吉田さん、そんな中で、つまらない事を、さアお春、お茶碗へ和女その湯と焼鹽を、して貴君お疵は全體どういふ工合です、また何處で、どうなすつて、お顔の色も悪う御坐いますよ、第一お着物が、血も點いて居りますから召し替へないと不可ません、これと和女その押入を開けてさ、え、氣の利かない子だねエ」

「いや、さうして貰はなくつても宜しいがね、疵は七針ばかり縫ひましたよ、無論、浅い事は幸ひ浅いですが」

「おや、七針、そりやア貴君、いくら浅くつても大變な疵ですよ、まアどういふ理由で、そんな疵を」

「それが女主人、如何にも不思議だ、いろいろ考へて見ても變だ、元來こんな事は過ぎ去つた後の祭禮で、言つたところが役には立たないがね、先刻、ちやうど日暮前あの根津の権現横町まで歸つて來ると四五人の壯士らしい書生が、どやくと一時に現れて、つまり中にナイフでも持つて居た奴があつたらう、醫者の鑑定でも何か鋭利な刃の薄い小さいもので、すつと來たのが幸ひ頭の毛の上から迂り加減に斬れたから宜かつたが、もし直接に手徹のある皮膚の上だつたら、それこそ大變ださうだ、しかし素性の知れない奴に理由も分らず大切の頭を遣られたのが残念だ、これまで人に怨恨を買つた覚えのない身體ですからねエ、猶更ら以て心外だ」

「お春や和女、ちよいと階下へ降りて居な、用があつたら呼ぶから、そして火鉢の火も

絶さないやうに、お湯も澤山、沸かして置くんだよ、早く門戸を閉めて仕舞ってし  
 眉うち顰めて思案顔に降り行く娘の姿を見返りながら、おもはず膝を進めつゝ、聲を潜  
 めて、

「吉田さん、事に依ると、妾どもが何とも申譯のない理由になるかも知れませんよ、  
 その相手の顔を御存じ御坐いませんでしたか」

「いや、最初か、ツた奴はステツキを持った色の小黒い背の低い肥った書生だから、  
 確乎に覺えてるが何分、背後へ一時に折り重つて来た三四人は顔を見る寸隙もなか  
 ったさ、しかし女主人、申譯のない理由とは全體どういふ理由だね」

「いえ別段、これといふ極ツた的も何も、ある理由では御坐いませんがね、實は過日  
 づうくしく押し掛けて来て、母子が困りきりました、そら、貴君が借金取と間違  
 へた、あの人、ありやア娘が小石川に奉公して居りました家の親類とかで井出とい

ふ人なんです、また娘が急に暇を取りましたのも原因は其、井出さんが薄氣味わる  
 く何だか妙に付き纏つて、それがため遁けて歸りましたやうな理由で、過日、こゝ  
 へ来たのも、やはり娘の事で、いや花見に連れて行くから貸せの、どうのツて、そ  
 れはく貴君、うるさい事だね、その貴君、井出といふ人が今朝また、まゐりまし  
 たの、ところが妾は勿論の事、娘も御承知の通り、あゝいふ我まゝな一本調子ですか  
 ら、随分とね貴君、なるほど男としては居堪まらないほど、酷く、あとに念の残ら  
 ないやう猶更ら酷い事を申しましたので、よほど怒った様子に見えましたが、その  
 中に一言、貴君の事を妙に考へ違ひしたもんか、ほゝゝゝこゝが妾どもの申譯ない  
 こツて、あの二階の、まア此邊は吉田さん平に御免を願ひますが、あの二階の垢は  
 居るかと貴君、唐突に、とんでもない事を、只それだけならば宜う御坐いますが、  
 もはや自暴になつて貴君の事を、まるで目の仇敵に取つたもんですから、娘は半泣

きのやうに口惜しがって、また妾も黙っては居られませず、母子で、つひ餘計な口  
 數をきゝましたのが、もしや萬々一、勿論あんな柔弱けた本人が手を下さす筈は御坐  
 いますまいが、随分、いろんない書生に取巻かれて吉原などへ行く人ださうです  
 から、只今お談話を承つて、はつと胸に、第一、貴君が他人に怨恨をお受けなさ  
 るやうな方でないと思ひまして、猶更、もしこれが外れない理由にでもなれば、何  
 とお謝罪を申して宜いやら、兎も角、吉田さん、恐れ入りますが警察へ一應お届け  
 になすつた方が、まだで御坐いますか」

吉田雄藏、差俯いたるまゝ黙然として聞き居たりしが、組んだる兩手を膝に落すや否、  
 しづかに頭をあけて閉ぢたる兩眼を開きながら、總身の溜息ほつと吐きぬ、

「なるほど、談話の順序は能く分りました、しかし相手を必ず其人と断定する事は出  
 來ませんから、まア自分の災難と諦めますさ、また直に警察へ訴へて出る事も氣の

付かないぢやアなかつたですがね、相手は遁けて仕舞つたし夕暮前ではあり、第一  
 この疵は浅いにしろ外と違つて頭といふ一點に、まづ何よりも醫者へ断け込みまし  
 たのさ、よし訴へて相手を出したところが、彼等に刑を與へるよりも多少前途の事  
 を考へる此方に嫌な事があるから、まア此まゝで置きませう、疵は凡そ一週間で宜  
 いさうです、しかし其、井出といふ男、怪しからん奴ですな、小石川の何處です」

「はい、春が奉公いたして居りましたのは小石川の原町で、雀部といふのですが、井  
 出といふ人は其、奥さんの甥に當るんださうで御坐います」

「はゝア、なるほど、しかし出來た事は仕方が無い、これに就いて心配は無用ですぜ、  
 強ち其人と極つた理由でないから、なほ以ての事」

「でも貴君、それでは、あんまり御人品過ぎて」

「いや、われ〜に人品も何もあつたもんでない、たゞ利害の數に於て、此まゝ黙つ

てるのです」

「しかし、妾どもの氣が濟まないのみならず、どうも貴君に對して、申譯が御坐いませんもの」

「女主人、いつまで言ツても同じこつた、もう寝ますからね」

「おや、妾とした事が、とんでもない、うツかりして、嘸お辛う御坐いませう、さアどうか、只今すぐ蒲團を、いえ貴君、上は兎も角、かういふ時に下へ澤山あつく敷かないと不可ませんよ、そして御用が御坐いましたら御遠慮なく、お手を鳴らして下さいましよ、母子のうち一人は貴君きつと起きて居りますから」

「さう大層にして貰ツちやア困る、却ツて困る」

「大層も小さうも御坐いますもんか、よく貴君ア困るくと仰しやるよ、せめて御養生の間だけでも母子を下女ぐらるに思ツて下さらないと此方が困ります、兎も角、ち

よいと階下へ、すぐまた上ツて御用を伺ひますから」

そのまゝ階下に降りんとすれば、立ちながら梯子段に身を倚せて耳を敬てし娘の春、はツと驚いて飛び退きしが、火鉢の前に坐したる母親の顔、しげく打守りて聲を潛めつゝ、はや眼に持つ一滴の雫、

「ねエ、おツ母さん、妾、どうしませう」

「とんだ事になつたねエ、しかし憎い奴だよ、きつと彼奴に違ひないとして見れば、お春や、和女も母も吉田さんに申譯が無いよ、それでも御覽、あの人品で心が大きクツて、あきらめの男らしい立派な事」

「ほんたうですねエ、どうして、まア、あんな氣になれるンでせう」

「そりやア和女、大體に人間の出来が違ツるンだよ」

「さう考へると、猶更ら彼奴が憎らしいよ、どうかしてやりたい事ねエ、もし妾が男

なら、きつと復仇を取るんだが、口惜しいッてば」

「その口惜しいだけを和女、吉田さんに盡さなければならぬよ、お春や、こゝは和女の盡し時だよ、あの疵の癒るまでは夜の目も寝ないくらゐに介抱してあけて、なるほど彼女はと、思はれるのが母への孝行だよ、第一また和女のためだよ、うツかりしちやア不可ないよ、宜いかね」

「だッて、おツ母さん、わざくそんな事すると、また却ッて悪いよ、あゝいふ方だから」

「黙ッて母のいふ通りに和女おしッてば、強情な子だねエ」

「あれ、おツ母さん大きな聲で、お二階へ聞えますよ」

「和女が聞えさすンでないかね、わからない」

「わかつて居ますよ、ほゝゝゝ」

「これ、笑ふといふ事があるかね、こんな時に」

### 其 八

うまれて十四の年まで削るが如き山の嶺を飛び廻り穿てる如き谷の底を跳ね廻ッて、都人士の眼には軽業師と等しき境涯に育ちしかど、身體髪膚いまだ曾て兎の毛の疵も負はざりし我、里に出でて風車の如く追ひ使はれし三年の艱難辛苦にも生爪一枚を剥がせしことなく、この東京に來りてよりは猶更の我、苦學十年の間を愚の如く守ッて前後一千人の學友にも無用の交際なければ戯れに拳の影さへ受けし事なき我、そもそも二十六の曉に素性も得知れぬ奴の亂打亂撃を蒙りしのみか、一身を一國として帝王の居座ともいふべき頭に三寸の斬疵を竹けられしとは何たる事ぞ、しかし其相手は確實なる證據なけれど、由來の我心に問うて一點の覺えなく現在こゝ

の母子に聞いて何とやら闇中に物を掴みし心地、よし敵は正しく其者ならずとも、其者  
 また必ず我敵となるべきを思へば、あゝ去るべし去るべし、既に去らんと欲して三度  
 も去り得ざりし我は竟に斯くの恥辱を受けたり、咄この薄志弱行の奴め何のために今  
 日まで去り得ざりしか、此後さらに頭を割られても四里四方の大都會この六疊一室の  
 外に我身を置くべきところ無きかと、吉田雄藏おもはず人知れぬ枕を敬て、我みづか  
 ら我を嘲りぬ、

されど母子が我に對うて其身が罪を犯せしが如く、また我この疵を九死一生の大事に  
 等しく驚いて、夜の眼も寝ずに涙片手の介抱、さらに血を分けし肉親も及ばぬほどの  
 芳情を思へば、その驚愕を冷かに笑ひ其芳情を俄に捨て、今このまゝに立去らん事ま  
 た忍び難し、

やうく間に一日を置いて三日目の朝、その疵の疼痛は無けれど其疵のために發せし  
 前夜の熱に疲れて、とろくとせし曉の一睡なほ未だ覺めやらぬ八時頃、例の上田  
 力、山の如き兩肩を動かしたつゝ、座禪前の達磨に等しく訪ひ來りぬ、

「たのみます、吉田は居りますか」

折しも娘と共に掛替の繻帯を巻き直せし母親そのまゝ立出でて、一度さへ逢へば忘れ  
 ぬ筈の上田が面體、見るや否、

「おや、よく入らっしゃいました、どうか此方へ」

「やア女主人、過日は失敬々々、また猪猿の相手が來ましたよ、はゝゝゝ、吉田は居  
 りませうな」

「いえ、あの節は妾こそ、はい、吉田さんは、お在で御坐いますが、貴君、とんで  
 もない御災難で、大變な、お怪我をなさいましてね」



「何、大變な怪我をした、全體ど、どうして、どんな怪我だ」

「まア貴君、ちよいと、お待ち下さいまし、只今、すやくお寢みになつてる筈で御坐いますから、お春や和女、そつと見ておいで」

二階へ上り行く娘の後姿、じろりと見上げながら、音太き聲を潜めて、

「女主人、どういふ怪我だね」

「それが貴君、お氣の毒で、つまらない奴に少々お斬られなさいまして」

「人に斬られたア、吉田が、む、」

くわツと見開きし大眼球、夜着の袖口に等しき脣端を結んで、娘が降り来るも待たず其ま、身を起し、のそくと二階へ上り行きぬ、

山の如き大兵、ぬツと無言に現せば、はツと驚いて思はず枕頭を立去るお春の聲に、やうく眼を覺せし吉田よりも上田の眼中まづお春を睨み降して、そのま、枕頭に入

れ替りつゝ、半面の繻帯を差覗きぬ、

「おい吉田、どうした、兎に角、しツかりしろ」

吉田雄藏、おもはず枕を欬て、そのま、くといふ上田の言葉を耳にも入れず、夜具の上に坐しぬ、

「は、馬鹿な目に逢ひましたよ、しかし僅少の疵です、たゞ頭の方で繻帯が大業だから、酷く見えますが何、大した事はない筈です、つまり摺疵も同然で」

「疵の大小は儲置き、人に斬られたといふぢやア無いか、全體どういふ奴だ相手は」

「階下の女主人に聞かなかつたですか」

「何た、つまらない奴に災難で斬られたと聞いたばかりだが、君は現に相手の面も見て、また多少の胸に當る事はあるだらう」

「ところが、いかにも馬鹿けたこつて、殆ど夢のやうな理由です、つまり一昨日の夕

方、貴兄と柳島の不在を訪うて、根津の権現横町まで來ると、不意に四五人の壯士めいた奴等が現れて、無言のまゝの鐵拳雨下といふ始末、其中にナイフでも持つて居た奴があつたと見えて、左の頭から額口へ三寸ばかり、しかし浅かつたのは不幸中の幸で、どう考へて見ても思ひ當る事は無し、まづ人違ひの災難と諦めて居ますよ。」

「や、怪しからん奴どもだな、實に残念だな、そんな奴原に、もし乃公が居つたら畜生、壯士も絲瓜もあつたもんで無い、いちく捻り飛ばして脛も腰も、ふん抜いてやるんだつたに、しかし吉田、いくら考へても思ひ當る事は無いかね、全くの人違ひかね、いくら不意だつて君も山國に育つた産物だ、せめて一人ぐらゐる取つて押へて生證據を残しやア宜かつたに、惜しい事をしたな、何か其場に敵の目印になるやうな物でも落ちて無かつたかな、いかにも乃公が居りたかつたよ。」

「なるほど、貴兄が居つたら面白かつたでせう、しかし僕も随分、やりましたさ、外

貌よりも激しく遣つたから奴等も遁け散つた理由で、もしステツキか何か得物がありやア吉田雄藏これでも山男です、たしかに一人や二人は其場に叩き倒したでせうよ、實ア後で兩手の指の股に頭の毛が、よほど搦んで居ましたからなア、ところで此事は柳島へ黙つて居て下さい、疵が癒つて後、どうせ談話をしますから、また貴兄のところへも知らさない心算で居ましたのさ、ちやうど明日、疵口の絲を抜き取るさうで何、もう、すぐですよ。」

「む、なるほど、人違ひといやア仕方も無いが、仕方が無いといふだけ猶更ら残念で憎むべき奴等だ、時に君、今日こゝへ來たのは外でも無い、もし例の博士へ再び寄宿する都合にならないやうな事なら、當分まづ僕の家へでも寢泊した方が宜からうと思つて相談かたぐ、しかし、さういふ疵の出來た以上、まア癒るまで此方に居るさ。」

「こりやア妙です、實ア僕も、その邊の事に付いて一昨日、貴兄へ相談に、ところが柳島も其日は不在で、歸途に斯ういふ始末、無論、疵の癒り次第、すぐ轉じる決心です」

「それく、それが宜い、流石ア君だ、それに限る、人の行路に於て最も恐るべきものは、外見に現るゝ三寸や四寸の斬疵よりも、その痕跡なくして其皮肉に喰ひ入らるゝ大疵だ、鐵腸男兒また其腸を喰ひ取らるゝ凡例は随分、世の中にあるこつたからなア」

「はゝゝゝ蓬髮垢面ともいふべき一介の貧乏書生、喰ひ入らるゝ皮肉も腸も、まだ整はないから寧ろ却ツて其、恐れも無いやうな理由ですがね、兎に角こゝは去りませう、去るに如かず、はゝゝゝ」

「その恐れがあつても無くツても去る方が宜い、あんまり此家の女主人が如才なさ過ぎるやうだ、第一あの娘が不可ン、あいつ聊か小面が美人系を帯びてるからねエ、全體ありやア君、僕が始めて此家へ来た時、君と同伴に出がけの門口で逢ツたんだらう、その時の君が説に曰く、小石川の屋敷奉公してると聞いたが始めて見たと、ぢやア君、あの時に始めて見て爾來そのまゝ家に居るんだな、不可ン、大に不可ン、木は静ならんと欲すれど風これを動かすの理で、いかな大木も竟には根の弛まざるを得ずだ、僕の如き野暮漢と雖も、局外より一瞥して、その不言の刹那間に一種いふべからざる不穩の狀を看取す、あゝ君、去るべしだよ、しかし疵の癒るまで動いちゃア却ツて宜しくない、只その決心さへありやア結構だ」

「はゝゝゝさう變に感じられても困りませんがね」

「いや、感じ了つた理由でない、また將に感ぜんとする理由でも無い、今や感じつゝあるんだから、この愚物鈍物、君がため俄に意外の機敏になつた邊を君、わるく取

ツちやア不可ンゼ」

折しも階下より女主が片手に茶盆を携へ片手に鐵瓶を提げて上り來りつ、續いて赤き袖口より雪を欺く眞白の手首そつと差出せし菓子を受取りつ、

「まことに遅くなりまして、つひ貴君お湯が、冷めて居りましたもンですから、さアどうか、召上ツていたゞきたう御坐います、時に吉田さんは此度、とんだ御災難で」

「なアに出來た事ア仕方が無いです、しかし、いろく御厄介でせう」

「どう致しまして貴君、少しも行き届きませんので、わけて此事に付きましては妾ども母子が如何ほど御介抱申し上げても、實は濟まないやうな理由が御坐いますもンですから」

きくや否、吉田雄藏おもはず膝を叩いて目配せすれば、女主も俄に心付いたる體、は

ツと言葉を差止めしに、上田は例の大眼珠ぐるぐると廻して、

「おい吉田、その疵さへ癒りやア、なるべく後は身體を大事にセンと不可ンね、その上また、どういふ場合で、いつ何時どんな災難を受けるかも知れないから、古い文句だが君子それ危きに近寄らずさ、ねエ女主人、遣り損ツて仕舞ツちやア、氣が付いても無効なもンさ、は、は、は、は、は」

其九

さらぬだに我みづから我を促しつ、今は只この疵の癒ゆるを待つのみ的事、癒えなば直ちに此家を去らんと思ふ折しも、上田が訪ひ來て餘所ながら語りし言葉の端々、かの大風の吹くが如く眼にさへ母子の情の露の溢れて見ゆるかと思へば、猶更一日も早く去りたし、

疵口を縫ひし糸も無事に抜き取りて、その間の熱さへ三十八度六七分が一時の頂上、まして元來の人に過ぎたる健全どこに何の支障もなく、いよく明日は此家の名残、同じうは母子のものゝ感情も害せざるやう、我また後に言葉の種を残して思はぬ花の芽を吹き出さぬやう、願はくは愛情の神よ暫く雙方の念頭に宿り給ふなど、人知れぬ今宵の枕を叩いて人知れぬ一種の心を悩ましぬ、

流石に何とやら寝られぬまゝの終夜、枕頭にランプを引き寄せて書を読みつゝ、今しも階下の柱時計いと、冴えて二時をうちし折しも、俄に立騒ぐ人聲物音、耳を澄せば遠くもあらぬ一町か半町のうち次第に高く手に取る如く、やがて火事だ火事だと叫ぶ聲もろとも、すり半鐘は睡れる空を破つて枕を劈くばかりに響き渡りぬ、

されど物に慌て、騒がぬ天性、はつと驚いて岸破とも跳ね起きず、讀みかけし書籍のページ數を見覺えてランプを片寄せし後、靜に起き出でつゝ、窓を開けば、はや既に闇を

貫きし一天の紅、飛び來る火の粉は急雨の如く軒をかすめて、火炎を包める黒烟は正しく眼前の團子阪より千駄木の方面、首突き出さば忽ち半面を焼かんばかりの近さに、さすがの吉田雄藏も始めて驚きぬ、折しも階下より女主の聲、

「おや吉田さん火事ですすよ、すり半鐘ですすよ」

いひつゝ、褻衣のまゝに襟かき合はして上り來りしが、開ける窓の外に火の粉の飛ぶを見るや否、おもはず走せ寄つて身を軒下の戸際に差伸ばしつゝ、また忽ち振り返つて聲さへ平生に變りぬ、

「こりやア吉田さん大變ですすよ、つひ貴君そこですもの、しかも火が大きくつて、お春や、お春や、さア起きるんだよ、吉田さん萬一の用意で御坐いますから貴君、大事の物だけは今のうち」

「いや僕に大事の物も何もありませんが、もし御心配なら手傳ひますぜ」  
 「いえ、まア貴君は貴君の物だけ」

いひ捨て、其まゝ二階を駆け降りし時に、もはや近處合壁も一時に立騒ぎぬ、もし萬一の事ありとも、吉田雄藏が第一の大切は其身一貫、多年の苦學慘澹、砂中の黄金を拾ひ集めし如く自ら筆記せるもの第二、第三に刊行書籍は積んで山の如きも時に取って反故に等しと、まづ筆記ものを一風呂敷に包んで机の上に置きしまゝ、かけ降りて見れば、母子もろとも十三の弟を相手に簞笥の衣類を引き出し手道具を持ち運ばんとする體、

「女主人、さう氣を揉んで慌てるに及ばない、いざといふ時に出すもんだけの用意さへして置けば宜しいよ、さアとなれば僕が働くから、しかし兎も角、どんな工合か火事場の様子を見て來ませう、提灯があれば貸して下さい、巡査が喧しくって無提

灯ぢやアとても近寄れないから」

「どうして吉田さん危う御坐いますよ、第一まだ貴君お疵が癒ツたばかりで」

「大丈夫、さう危険なところまで行きませず實際また行かれない、たゞ消防線の此方で様子を見るばかりです、その様子次第で直に引ッ返して道具を持ち出しますから、お春さん提灯だ〜」

「あれ吉田さん、いけませんよ、またお怪我をなさると」

「は、は、さう度々怪我をして堪るもんか、さア提灯を」

「だって貴方いけませんよ、ねエおツ母さん、もし往らッしやるなら提灯なしで見られるところから御覽なさい、出しませんよ提灯は」

「眞實ですよ吉田さん、つい貴君その辻から」

「ぢやア兎も角、その辻まで往ッて見よう」

門口を飛び出せば、こゝにも織るが如くに叫んで馳せ違ふのみか、半町ばかりの辻には火の粉を浴びて黒山の如き人浪、一天を焦せる猛火は次第に高く左右に擴がりつゝ、はや二三十軒も焼き盡せしとの噂に違はず、風なけれど自然に風を呼んで焔々たる火の手の勢ひ今は何處まで伸びんかと思はるゝ體に、吉田雄藏そのまゝ取つて返して走せ入らんとする折しも、向側の塀際に停んで往來ふ人の頭上に伸び上りつゝ、頻りに我二階を打仰ける三四人の書生、ふと何心なく見れば、ぱつと灯影に照り返されて赤鬼の如く、その中の一人は正しく根津の權現横町にて我に突き當りし最初の奴、さては此奴、いよく例の餌を喰ひし犬馬に極つたり、しかも今この火事場の方角を幸ひ斯くまで素早く馳せ込んで、この雑沓混亂に乗じつゝ、猶まだ我を覗ふとは言語道斷の奴原、おのれ山男が覺悟せし上の鬪力を知らざるかと、おもはず拳を握つて力足を踏み止めしが、また俄に思ひ直して其まゝ走せ入りぬ、

待ち兼ねし母子もろとも出で迎へて前後に取纏るが如く、  
 「どうで御坐います吉田さん、逆も無効ですが、よほど火の手が大きいのでせうね、お隣屋でも貴君そろく用意をなさいますよ」  
 「いや、なか／＼火の勢威は盛で急に消えさうもないが、また狼狽へるに及ばない、第一この通り風も無いから、あの辻で喰ひ止めるだらう、しかし消防夫が辻の角家を取崩すやうな騒動になると最早用意専一だ、まづそれまでは安心してるが宜からう、しかし案外の大変な人出だ」  
 「おや、さうで御坐いますか、それで少しは安堵いたしました、ねえお春、一時は全然どうしようかと思つたわエ」  
 「おツ母さん、妾まだ胸に動悸が打つて居ますよ、怖いけれど、また見たい事ね、ちよいと、お二階へ」

「や、お春さん、止すが宜い、この門口にも人が大變だ、そこへ若い女が首を出して餘所の災難を見るもんでない、それより萬一の時お化粧道具の一個も忘れないやう今から始末して置く方が宜しいよねエ、女主人、はゝゝゝゝ」

「眞實だよ、和女、こんな中でも吉田さんが、和女のためを思ツて下さるんだから、うか／＼すると罰が當るよ、しかし貴君お化粧道具も何もありませんよ、母子三人の衣類ぐらゐる各自の身に纏ツて出られる身代ですから、ほゝゝゝゝ」

「いや、何にしても萬一の時は表より裏へ運び出させう、往來は却ツて人で混雜だ、裏口の竹垣あんなものを押し倒すのは雜作も無いから、裏の空地へ持ち出して、あの路地を横町へ出る方が宜い、そして弟さんを中間に挟んで三人とも順に放れないやうセンと不可ない、僕は男だから事に依ると表へ出る覺悟だ、風呂敷包みは宜いが、まさか其葛籠なんか荷いで、あの路地は通れまい、ところで女主人、何か丈夫

な杖のやうなものはありませんかね、人混の中を割ツて通るに握り拳ぢやア道が開けないから、また一事は重荷の力にもなるから」

「まア貴君さうして戴かなくツても、どうか妾どもと御同伴に」

「さうですよ、おツ母さん、少しの物は焼けても宜いから、やはり御同伴にねエ」

「ぢやア兎も角、それは其時の場合として置いて、今いうた杖のやうなものはありませんかな」

「さやうですね、何も御坐いませんが、あの裏口の戸の心張棒にしてる三尺ばかりの細い鐵の棒では重過ぎて不可ますまいね、ありやアこの横の壁が九尺の半格子になツて居た時の中央に使ツた柱がはりで」

「そりやア妙だ、それで宜しい、何、只ほんの人に押されないための用心だから、却ツて細い目立たない重いもんに限る、どりや、ちよいと持つて来て見ませう」



裏口の戸際より持ち來つて一振り二振り、空を切つて右手に打振りながら、おもはず力足を踏み占めて、片頬の微笑、平生は温順篤厚の君子然たる吉田雄藏も、むらくと湧き出づる心頭の憤怒に眉を逆立てつゝ、山家生育の本領を現しぬ、

「これで宜し、これで宜し、正に是れ佛者護身の利劍と一般、觸るゝと觸れざるは彼の善惡邪正にあり、はゝゝゝゝゝ」

そつと其まゝ二階に上り行きつゝ、ランプの火を吹き消して薄闇黒の中より、窓外は一面の白晝に等しき向側の塀際を見下せば、これほどの近火雑沓にも似ぬ餘りの静けさに規ひし的を失ひしたためか、さても悪運強し、狗鼠の奴原いつしか去つて影なし、また首を突き出して見渡せば、さしも焰々たりし猛火の勢ひ次第に衰へて、今は鳴り響きつゝ燃え盛る黒煙もなく、たゞ薄紅の低き火中より音なく白煙を吐くのみ、折しも東の空やうく白みかゝりぬ、

敵は去つたり夜は明けたり火は消えたり、もし一步を誤れば忽ち現じ出す一個の山間兒、敵を倒し夜を冒し炎を踏んで、いづれか其間に幾何の其人を失ふべき吉田雄藏、また幸ひにして平生の黙々たる讀書生とぞなりぬ、

されど猶いまだ去らず明けず消えざるものあり、よし自己の身は猛然と去つて消ゆるの勇ありとも、人知れぬ心の闇の明け放れ行く空に拭ふが如く一點の雲を残さざるや否、これを知るものは只それ愛の神か魔の神か、

包みし縷帯を取れば毛を割つて左の額口に痕を残せし三寸の斬疵、そもくこれを生行路の何とか見る、この疵の滅せざるかぎりには吉田雄藏いかに山間兒たるも都の露の運ぶ情は脱れず、この疵の滅せざるかぎりには吉田雄藏いかに君士人たるも曉の杖に

思ふ心は忘れず、おもへば思へば外の敵に受けたる怨恨の痕は正しく曲物の諺、おそろしや戀は木像の腸に宿りぬ、

山に育ち里に艱み都に苦しみて、數ふれば前後こゝに十三年の星霜、今や二十六の曉人にも世にも勝れし宿志を抱いて脇目も躪らざりし天晴の男も、あはれ三寸の疵に五尺の身を縮めて暫し浮世の草枕、いかなる夢を白髮の後の笑ひ種とぞする、ゆくての空は雲霞、また曇りて雨とやならん、また晴れ渡りて風とやならん、

## 吉田雄藏後編

### 其一

四書五經が治國平天下の基となりし昔は、人間まづ苦學十年を以て生涯の梢に花も咲き實も結べば、宿昔青雲の志こゝに達して、きのふの襤褸は忽ち今日の錦に着飾れど、到るところ識者と學者が秋の夕の草叢に啼く蟲の如き今は、十年の苦學そのまゝ直ちに浮世の賣物とはならず、まして猶更ら下宿屋の窓よりステッキを振り廻して立身出世の一足飛びは叶はず、やうく山を見當て、掘り出したる礦物に等しく、たゞの土でも石でも無いだけの證據、またこれを社會といふ大焔爐に投じて吹き分けられ、其うちに多少の金を含むか銀を含むか銅か鐵か、加之も生れ故郷の山にさへ居れば、そのまゝの土でも石でも濟むべきに、覺束なき鑑定

の礦物となつて、わざ／＼四方より此東京の大焗爐へ轉け出すもの年々幾萬個、これを吹き分けて金銀は儲置き、せめて銅か鐵でもあらば兎も角、分析溶解の結果、鏹一文の價値なき金糞となつて灰の如く吹き出さるゝものさへあり、天下の書生いづれも礦物として、この大焗爐に溶解せられし結果、その半は徒らに無用の金糞となり、残る半の二分は幸ひに學問の切賣して銅臭を逐ひ、その二分は鐵面皮に世の中を押し歩いて衣食の道を求め、餘すところ一分の過半を銀とすれば、果して金色燦爛たるもの幾何ぞ、まして油斷のならぬ世の中、その金銀に質物あり餉入あり鍍金あり、甚だしきは人造金といへる近來の喰はせものあり、さるをダイヤモンドやプラチナも同じ山より出るものとは、なるほど御道理なれど蛤の吐く蜃氣樓を抵當に金借るが如く、元來の脈が違へり、

その礦物ごろ／＼と五個、都會の片端を流るゝ隅田川の邊、汐入村の月もる宿より次第に轉け出して、前後それ／＼浮世の大焗爐に吹き分けられし後を見れば、流石に多年の空腹を抱へし苦學難行の曉、徒らに金糞となつて吹き出さるゝものはなけれど、偕いまだダイヤモンドも出でずプラチナも見當らず、たゞ確乎に多少の黄金を含める川上三吉あり、正しく銀塊となりし倉橋幸藏あり、どこまでも質朴なる銅の如く頑として鐵の如き上田力あり、かの黒田健次のみは此奴そも／＼鉛か錫かトタンかブリキか、但しはアンチモニーか、自己は赤銅の如く臙銀の如き滋味ありといへど實は正體の分らぬ怪しい男、以上四人の最後に出でし年少の吉田雄藏こそ、啞に似たる山出しの初心者ながら脇目も觸らぬ一意専心に學窓を卒へし結果は議論百出の才子才物よりも遙に優りて、加之も礦物のまゝ猶いまだ焗爐に入らず、着々たる一步また一步の前途

に我みづから我を磨きあけて如何なる光輝を放つべきか、

人事一切こゝに資本的の今日、苦學十年たゞ氣を以て勝ちし才力の効果は、憐れむべし  
 白癡が午睡の放屁一發に加かずとして、可憐ら半生の學識を自然薯の如く故山の巖陰  
 に埋めながら、猪猿を相手の獵夫に生涯を終らんとせしが、忽然また山を出でて再び  
 都門の風塵に後の半生を賭しつゝ、果は思はぬ奇縁の戀塚となりし川上三吉さても其  
 後の一轉、さらに大煩悩の大俗物と化して人知れぬ風穴より猛火を吹くが如く、恐る  
 べき賭博公開の説を事實の上に行はんとする奇才横溢の激變、如何に其出處進退を目  
 撃せる年少の吉田雄藏をして得るところあらしめしか、

また倉橋幸藏が謹直嚴肅にして黙々たる能度と周到緻密にして孜孜たる韃勉力の結  
 果、一度は筆を執つて都下を震動せし有数の新聞記者となり、一度は名を没して官海

に於ける前途の多望者となり、加之も其間に無用の交際を絶ち朝夕の衣食を節して三  
 年讀書の料を貯へつゝ、さらに身は一介の書生となりし折しも、たま／＼時の大臣に  
 惜しまれ其令嬢に思はれながら猶かつ大器晩成を期して眼前の榮華に安んぜず、けに  
 始めは處女の如く後は脱兎の如く、たゞ一片の約束を萬金に換へ心の情契を埠頭の煤  
 煙に残せしまゝ飄然と去つて海外に飛び行きし其人の本領、如何に資性の相似たる吉  
 田雄藏をして闇々裡に學ぶところあらしめしか、また例の黒田健次が物を抛け出す如  
 き大膽不敵にして、浮世を鼻唄まじりに絲瓜の皮とも心得ざる無頓着の結果、常に人  
 生の軌道を踏み割つて闇雲飛乗の一藝を仕損じながら、諺にいふ蛙面馬耳郎、いよく  
 平氣の面體を振り上げて自己一流の刷毛先に反故張りの大山を築かんとし、勃々たる  
 野心の頭腦ます／＼鉛細工の如く膨らして甘く軽く我まゝ三味の世を渡らんとする果  
 は、何事ぞ、身に過ぎたる可憐の貞女を苦勞の仕死に翻り殺せしのみか、竟に待合の

亭主となつて社會の闇黒面に泥水を呑む境涯、如何に初心の吉田雄藏をして自暴自棄の墮落を恐れしめしか、また五尺八寸二十貫目の大兵は玲瓏たる珠玉をもて作れるかと思はれ、天生の單純潔白、自然の無色透明、さらに一點の邪氣なく野心なく利慾の念なく華奢の望なく、加之も案外の滑稽洒落、をりく人の意表に飛び出して狼狽へし神の如く寢惚けし佛の如く、もし斯人を數百年前の片田舎に生れしめば正しく萬人の崇拜欣慕を受くべきに、たゞ憾むらくは數百年後の今日かくの世の中に生れて寸隙なき百鬼行列の都會住居せしむるのみか、わけて物の哀れは無慙や無用の才子を持ちて偏に我愚を守りながら常に人間秋風の感に打たる、上田力が境涯、如何に吉田雄藏をして湧き出づる同情の涙脆き男とせしめしか、

人間そもく臍の緒を埋めしところに祖先傳來の遺産を受けて醉生夢死の生涯を送らば知らず、また母の胎内より現世の風に當りて産聲あけし元來の本性そのまゝ變化なきものとすれば知らず、もし人は境遇に育てられ歲月に作られ時に應じ事に従ひつゝ、自然に化すべきものとすれば、吉田雄藏こゝに當年二十六の曉、地圖にさへなき豊後の山また山の奥なる因部の里の巖組を這ひ出せしは十四の春、これが國の都といふ佐伯の町の縁も情も薄き親類の端くれに奴僕の如く追ひ使はれて偷むが如く夜學に通ひしは丸三年、その家を飛び出して新に巢を立ちし隼の雲霞この東京に來りしは十七の夏、幸ひ馬にも踏まれず車にも曳かれず汐入村の苦學難行に伴うてより九年の星霜、加之も山出しの初心に以上いづれも一癖あるべき四人の性行いちく刻むが如く我耳目に入りて、その出處進退また深く自然の師となり戒めとなりし吉田雄藏の一身、都下隨一の名ある法學校に優等第一の首座を占めて業を卒へし外、如何に得難き人生の

活書を讀み得たるか、

## 其二

喧嘩と火事が横に伸びて江戸の花と咲き誇りし昔は知らず、今の喧嘩は辻の交番所で一喝の下に埒明き、火事は水道のポンプで一瞬のうちに消ゆる世の中、その花よりも團子阪に燃え上りし前夜の火の手、あれほど凄じき勢ひに一天の闇を焦しながら、今朝みれば僅に七八軒の焼跡より白き煙の名残を止めて這ひ渡るのみ、もし四里四方の大世帯とすれば火鉢の灰神樂に等し、されど犬の糞を踏み込んでも人の山を築く東京の習慣、まして寢耳を破りし不意のスリ半鐘に狼狽へながら、幸ひ無事に残つて今朝の道具を持ち込む奴が、却つて前夜の火事場よりも上を下への大騒動、加之も彌次馬といふ流連の見物その間に跳ね廻つて

織るが如し、

その團子阪に續きし千駄木の林町は、猶更ら風下の黒煙に吹き付けられて、飛び來る火の粉に軒を舐められしほどの混雜、わけて平生は萬事ひっそりと浮世の小格子を岡本かねといふ仕立物の手内職に繋ぎつゝ、四十後家の身に今年やうく十七の娘と十三の男の子を抱へし女世帯なれど、幸ひ六疊の空二階を貸せし吉田雄藏が力に助けられて、茶檜杓一本の紛失もなき今朝、ほつと胸を撫で下しぬ、

「やれく、まづ無事で宜かつた事ねエお春、しかし二階の吉田さんが昨夜から今朝へかけて、どれほど力になつて下すつたらう、いくら氣を揉んでも女手の母一人でさ、第一和女が其通りで、あの喜太郎がまだ十三の小兒だもの、どうも斯うも仕やうが無いぢやアないかね」

「あら、おツ母さん、酷いこと、和女が其通りだつて、どの通りですの、妾だつて前

夜は随分、一所懸命になつた決心ですよ」

「ほ、ほ、一所懸命になつて、あの通りの和女だから困るよ、うろくと自分のお化粧道具ばかり抱へ込んで、あゝいふ時こそ和女、しツかりしないと、吉田さんのやうな方は口でこそ仰しやらないが、すぐ心の中で無効な女だと、お思ひなさるよ」

「だって、おツ母さん、あの騒動の中で吉田さんが、わざと妾に、お化粧道具の一個も忘れないやうしろと、仰しやつたんですもの」

「さう仰しやつたつて、あゝいふ中で和女、好い氣になつて済むもんかね、いくら何だつて十七にもなれば、少しは物の考量といふ事をするもんだよ、母の氣も知らないで出過ぎても困るが、また和女のやうに母の氣も知らないで暢氣に、ほんやりして居られても困るよ、全體いつまで世話を焼かす子だらう」

「さう、いちくおツ母さんのいふやうに、第一また妾には其處まで行き届いて、人様の氣に入るやう出来ないもの」

「だから萬事に氣を付けて、確乎おしといふのさ、よく考へて御覽、あの吉田さんの、あの眞面目な、おとなしい方の大切な御顔へ、あゝいふ濟まない不意の疵を付けたのも皆、原因は和女だよ」

「あら、おツ母さん」

「あらかなもんかね、和女が小石川のお屋敷から急に下つて来てさ、すると間もなく其お屋敷の御親類が何か知らないが、井出とかいふ嫌に當世めかした氣觸な人が唐突に、づうくしく押し掛けて来てさ、いくら女親でも始めて逢つた母の面前で和女を、まるで自分が召使ひでもしたか但し妾奉公でもさしたやうに、まアあの時の生意氣な嫌味ツたらしい、そして齒の浮くほど柔弱けて居ながら大風な事ツてば、もし

死んだ和女のお父様が居たら黙って無事に歸す人ぢやア無かつたよ、おまけに吉田さんを變に履き違へた岡焼から、見當外れの自暴になつて、手下の悪書生に、あんな卑怯な事をさしたらしいよ、らしいぢや無い、きつと其事に相違ないよ、それで無くって吉田さんのやうな方が他に怨恨を受ける筈があるもんかね、して見れば和女、お春や、和女どうしても吉田さんに濟まないだらう」

「ですから妾は、おツ母さん、あの井出といふ奴が憎らしくつて、それで無くてさへ彼奴が嫌さに、お屋敷を遁けて歸つたくらるるですもの、その嫌な、すかない奴が、吉田さんの御顔へ疵を付けたかと思へば、猶更ら口惜しくつて、口惜しくつて、もし今度、途中で逢つたら喰ひ付いてやりますワ」

「ほ、ほ、馬鹿な子だよ、そんな出来もしない事を云つてるから困るよ、しかし途中どころか、あゝいふ厚顔しい恥も何もない猪鼻助は、また平氣で押し掛けて來

るかも知れないから、この後は厄病神と一般で當らず觸らず、隠れるより外に仕方がないよ、もし來れば、すぐ二階へ駆け上つて、お、二階といへば吉田さん、どうなすつたか、前夜からの御疲勞で寢て在らつしやるらしいが、兎も角お茶でも持つて、ちよいと和女」

やうく火事騒動の後始末、まだ小道具の取散らせし中ながら、水入らずの母子が膝と膝との物語り、人知れぬ内證こつそりと聲を潜めて二階の梯子段を見上ぐる折しも門口より不意に入り來りし人の登音、

「甚だ突然ですが、お二階に吉田といふものが居りますか」

母親まづ起つて障子を引き開くれば、軽く髻駝無地の烏打帽を戴きながら羽織も小袖も同じ大島紬、ぞろりと重く着流せし三十四五の男、

「實は今お門を通りかゝつて、ふと二階の窓を見ると確乎、首を出して居たのが吉田



雄藏かと思つて、私は黒田といふもんです、黒田健次と」

懇懃の會釋を残しつゝ二階へ上りて見れば、疲れて睡りしかと思ひの外吉田雄藏、まだ昨夜のまゝ解きもせぬ大風呂敷より一二冊の書物を引き摺り出しながら、半窓に片眩うちかけ柱壁に背を凭せて黙讀の體、

「吉田さん只今、黒田さんと仰しやる方が見えましてよ」  
聞くや否、おもはず振り返りて眉を顰めぬ、

「黒田、むゝ黒田」

「はい黒田、健次様と仰しやいましたよ」

「やア、來ましたかい、どうして此家を」

「つい通りがかりに、その窓から貴君を御覽なすつたとかで」

「女主人、そりやア僕の友達ですがね、や、よろしい、仕方がない、こゝへ上げて下

子」

「はゝア、この二階ですか、いやゝ案内に及びません、どうせ一室でせう」

はや既に一言一句の端さへ自己を現しながら、のツそりと梯子段を昇りて、ぬツと半身を差出せしは汐入村以來の難物、第一番に飛ひ出して浮世さんぐに掻き撈りし横紙破りの黒田健次、雨にも風にも變らぬ無頓着の平氣面に四邊かまはぬ無遠慮の高調子、

「はゝゝゝ、御意に召さない奴が來たぜ」

木に竹を繼ぎ合はしたるが如き不節調、愚の極と才の極と混き交ぜたる如き不調和、大風に灰を吹くが如き散漫の性と螻蟻の睫毛を讀むが如き緻密の性と搗き交ぜたる不釣合、加之も漠として何處が痛いやら痒いやら五體に急所の分らぬ男、いかにも自己が言葉に違はず吉田雄藏の御意に召さざる奴ながら、思へば昔、夏の藪蚊に終夜語り

明かし冬の布子一點寒曝しに抱き合ひし五人のうちの一人、あはれ其身は淫賣宿に等しき待合の亭主とまで成り果つれど、まだ眼球的の狂はざればこそ、通りがりの目に正しく我を見て飛び來しかと、おもはず心に溢るゝ一滴の涙

「や、よく尋ねて下さいました、實は前夜、つい其處に火事がありましたね、まだ上も下も引顛倒したまゝ、此通りの體です、無論、事がなくとも馳走振のない境遇ですが、わけて今日は、かういふ騒動で、しかし何處へ、今の御身分ちやア聊か方角が飛び放れて、あまり用の無かりさうな土地ですが」

黒田健次は儲どこまでも黒田健次、じろく四邊を見廻しながら何等か自己の得手勝手に呑み込んだる一種の微笑を浮べぬ、

「いや、今朝ア根津權現の近所に、ちよいと用があつてね、ところが前夜、團子坂に火事があつたといふから田舎もんのやうに、ぶらく焼跡の見物かたぐい谷中を上

野の方へ抜け出さうと思つてさ、すると此家の二階窓に君の顔が、案外だつたよ、

「はゝゝゝゝ」

「ですが、何、其うち是非、御通知しようと思つて居ましたが、實は近日また、すぐ外へ轉ずる心算ですから」

「宜いさ、宜いよ、そんな野暮な謝辭は言はなくつても、上田の仙人や川上の苦蟲と違つて、男女いづれも眞人間の弱點を遺憾なく取持つてやる待合の御亭主だ、はゝはゝ、時に君、君なる所以の君としちやア少々、こゝの家は變だぜ」

「さういふ理外の理は知りませんが、吉田雄藏の此家に居るのは何故、なぜ變です、どう變に見えます」

「何故つて、變だよ、少々をかしいよ、これが下宿屋とか、また旅籠屋の出來損ひとか、よし素人屋にしてもさ、神田か本郷邊の家賃だすけに貸二階の札でも吊下げた

家なら兎も角、こりやア大屋の吝な算盤珠から金利以上に弾き出した長屋普請と違  
 ツて、なるほど木口は感心しないが何處か手丈夫の自前普請だ、加之も人の目に立  
 たない浮世小路に出来た内證振だ、どうしてもペンキ塗の學校窓から飛だ出した初  
 心の探し出せる家ぢやアないぜ」

「は、ア、さう面倒な小理窟の付いた家ですかねエ、この二階を借りてから三月の餘  
 になります、始めて承りましたな、ところで此家が吉田雄藏のため、どういふ  
 工合に變です」

「おい君、吉田、今ちらと階下で見たぜ」

「何を、何を御覽なすったんです」

「は、は、は、恍けるない、無効だ、他は知らず黒田健次に向ツて、何を御覽なすつたも  
 無いもんだ、しかし偉い、天晴れ手柄だ、君としては猶更ら以て恐れ入ったよ、妻

いこつた、は、は、は、岡本かねといふ女名前、ありやア正しく危ツ氣のない母親だ  
 らうが、十七八の娘、なか／＼美だな、はッはッはッはッ

「や、こりやア他の事と違ツて黒田さん、怪しからん事を、其、あの娘が、どうも甚  
 だ」

「は、は、は、どうも甚だ其あの娘が、怪しからん女だらうさ、しかし君また甚だ、怪し  
 からないでも無かりさうだね、もし萬一、萬々一いまだ君の方で手固く野暮固く、  
 怪しからないにしろ、おい吉田、あの娘の方は既に大に内心、怪しかつてるぜ、此  
 お二階に吉田といふ人が居りますかと、不意に僕が這入った時の彼が風情、おもは  
 ず母親の小影に身を縮めて何とやら物に襲はるゝが如く、さも恥づかし氣の伏目勝  
 に差俯いた一刹那の舉動、また僕が梯子段を昇りかけて振り返るや否、はッと見上げ  
 た顔を反けて的もなく遁けた後姿、以上いづれも事なき尋常の處女としては頗る形

勢不穩の狀だ、つまり我知らず神經過敏の間に無言の説明をしてるぜ、は、は、は、おやツ、おやく、君の額際に妙な疵が出来てるね、僕ア他の面を見ずに饒舌るか、ら今まで氣が付かなかつたよ、む、頭の毛の中からだな、まだ癒って日が浅いやうだな、どうした、全體どうした傷痕だ、この家といひ、あの娘といひ、その疵といひ、由來の君としちやア殆ど事實にあるべからざる不思議な事ばかりだ、いよいよ變だ、事態なか、容易ならずだ、ますます怪しいぞ、何だか案外の仔細ありさうだな」

また例に依つて例の音を吹き出す咽喉と舌の作用、取るに足らざる相手として蓄音器を聴くが如く、たま、用なき耳の穴を貸せし吉田雄藏も、果は思はず癩癩に觸つて無言のまゝの眉毛を動かさぬ、されど平然たる平氣の横着面、自己また暫時の無言に四邊を見廻しながら、ふと背後

を振り返れば、いつの間にやら階下より運び上げし茶盆と菓子のあるに、流石の男も聊か身内の痒き體、今更ら出過ぎし我口の端を捻りあけつ、また忽ち無遠慮の可笑ひ、

「は、は、は、どうせ御意に召さない奴が来たと、君には前口上の伏線を張つたが、さて階下の母子へ對して少々、きまりが宜しくないやうだな、あまり僕が無遠慮に饒舌つて居たから、そつと黙つて置いて降りたんだらうよ、おい吉田、いくら後で僕を糞叩きに叩いても宜いぜ、君の都合の悪く無いやう、何とか巧く辯解すべしだ、とんだ不意の厄介物が舞ひ込んで、折角けしかつた女を、怪しかられないやうにしても氣の毒の至極だ、は、は、は、どりや歸らう、そのうち自然また出喰はす機會がある、だが君、おい吉田、人間そもく確乎たる衣食の道を得て世に立つまで、あまり嬉し過ぎた女運に叶ツちやア不可、せ、相手が可哀さうだ、手に白刃ア持たない

が浮世に落ちた苦勞も苦勞、するだけの苦勞さした結句の果に一人の貞女を殺して  
 来た黒田が好い手本だ、しかし僕を以て君に強ふる理由では無いよ、は、は、は、は、  
 し川上か上田に逢ッたら宜しく言ッてくれ」

輕き會釋もろとも座を起てば、吉田雄藏、なほ不快の顔色に無言のまゝながら、其身  
 また起ッて送り出さんとせし折しも、門口より破鐘の音響に等しきは正しく上田力、

「吉田ア居りますか」

二十貫目の大兵より呻り出す聲この二階の隅まで手に取るが如し、

聞くや否、はッと思はず満面を皺めし黒田健次、進退こゝに谷ッて梯子の中段に立往  
 生しながら、鬼でも蛇でも恐れねど此奴ばかりは我ために十年來の苦手、前世からの  
 暗劍殺と額越の小聲、

「さア事となりにけり、おい吉田、えらい奴が来たなア」

始めての家ならねば心易く、小山の動き入るが如き上田力、この體を見上げて、

「やア、久しぶりの動物だな、こら黒田、降りるのか昇るのかい、まてくゝ兎も角も  
 乃公が押し上げてやらう」

いひつゝ五尺八寸大力の兩手そろりと伸ばせば、健次おもはず慌て、梯子段の角に向  
 脛を打ちながら飛び上りぬ、

「炭俵と一般の取扱されて堪るか」

上田力、鼠を袋に追ひ込むが如く昇り来て、例の達磨に似たる大胡坐、

「吉田、此奴どうして舞ひ込んで来た、君また無用な端書でも呉れたンぢやないかね、

おい黒田、貴様ア今、炭俵と一般の取扱されて堪るかと言ッたやうだが、炭俵と  
 いふものア淫賣宿の亭主と違ッて世の中に必要の品だぞ」

「そら始まつた、どういふもんか上田、流石の僕も君だけに閉口するよ、君また俗界

の人間放れをした仙骨で居ながら、何故この僕に對つた時ばかり娑婆ッ氣を出して、さう無情に残忍酷薄だ、全體こりやア世諺にいふ通りで、お互の性が合はないんだらうか」

「は、貴様のやうな奴に性が合つて、それこそ堪るもんかい、しかし久しぶりの出逢ひだ、ゆるく徒然の相手にしてやるから暫時そこに控へて居れ、時に吉田、前夜は火事騒動があつたね、見りやア上も下も道具を片付けたやうだが、定めし女子供だから一人で働いたらう、ところで却つて例の事には僥倖の引汐時だ、まづ此邊を一段落として宜しく去るべし、男兒そもく決意と實行の間に躊躇の餘地を挿むべきもんで無い、實に過日、歸つて直ぐ鼻アに相談して見たさ、するとね、は、女は執念深く忘れないもんで、こゝに居る黒田が、忽ち比較に出るよ、は、嘘にも義理にも黒田さんのやうな人は眞平御免ですが、あの吉田さんなら

生涯夫婦の食ふものを缺いてもといふ大賛成だから、大歓迎だから是非、急に來るが宜いね」

「いや、段々と有難う御坐います、實は僕も前夜この通り幸ひ取片付けた荷物を此まま解かずに置いて、兎も角まづ身體だけでも先へ出ようかと思つて居ました」

「む、君だ、それでこそ君だ」  
上田と吉田の間へ葉卷の煙、ぱつと吹き出して一種異様の微笑を左右へ振り分けし黒田健次、

「は、ア、讀めた、こりやア吉田に女難の恐れある此家を出ろといふ上田の御接介だな、加之も出た上は神聖なる乃公の家へ來いといふ理由だな、や、吉田がために無事を祈る上田としては道理、さもあるべき筈の婆心で、また上田を重んずる吉田の性としては結局、その言に従はざるを得ないところだ」

「黙ッてろ、貴様の出る幕ぢやア無い」  
「しかし上田、ちよいと今、聊か小耳に觸ッた事を聞いたぜ、如何にも僕は曾て君が貧乏世帯の喰ひ潰しとなつて随分、世話にならないでも無いさ、無いが今日、吉田を引取るに就いて、君の細君から反比例の槍玉にあけられなくつても宜からうかと考へる、吉田のために夫婦生涯の衣食を缺くも宜いさ、そりやア御勝手次第だが、嘘にも義理にも黒田さんのやうな人、やうな人とは君の鼻ア少々、不穩當な言を吐くもんだな、その様子ぢやア毎々御丁寧に僕の店卸しが始るこつたらうなア」  
「は、は、は、どういふもんか、ちよいと物を言ッても此奴かういふ奴だ、よく考へて見ろ、我々に面も合はせないやうな事を仕出來した果が、本所の奥で九死一生に死に損ッた身體を蟲の息で持ち込みながら、加之も忘れた事を考へ出すやうに小首を捻ッて、世話にならないでも無いと吐す、は、は、は、こら黒田、いくら境遇が違ッ

ても幾年このまゝ逢はずに居ても、たとひ絶交しても昔おもへば互に一枚の煎餅蒲團を譲り合ッて來た交友だ、別段、氣にも止めないが世間の他人へ對ッて貴様、さういふ不埒な料簡で横着な顔を叩くと竟には一身の置き處もなくなるぞ、この乃公は兎も角、散々あれほど厄介かけた乃公の鼻アには、せめて二月か三月に一度ぐらゐ、たづねて來るもんだ、やい黒田、今ア淫賣宿の亭主となつて、どこの溝泥から掬ひあげたか似たもの夫婦の小鍋立て寢酒に酔ひ喰ふも宜いが、貴様にやア實に勿體ないほど過ぎた苦勞の仕死だツた、可哀さうに、あの貞女の墓の方角を忘れず、をりく、詣ッてやれよ、いくら脳味噌の腐ッた身にも覺えてるだらう、病みほけて骨と皮になつた貴様の藥代に破れ三味線を抱へて、秩父嵐の北風で大地も凍る兩國橋の袂に繼ぎ合はした襦袢の素袷一枚で、こら黒田、この乃公が見付けた時、あの貞女が拜んだぞ、助けてくれと拜んだ理由ぢやア無いが、どこに居ると問ひ詰めた

乃公に、今あの人を見せましては妾が濟みませんから、どうか妾の一念で元の身體にするまで見通してくれと、な、泣いて拜んだぞ畜生、加之も其まゝ死んで宜い貴様が、のめくくと生き残って、あの貞女が二十六の死際に何と言った、今までの難儀も苦勞も惜しくは無いが只一事、たゞ良人の出世を見ずに死ぬのが残念だと貴様の手を握ったまゝ落ち入ったといふぢやアないか此、この罰當りめッ、あゝ世の中に墮落のしようもあるが、待合の亭主になつた出世を見て草葉の蔭から嘸、さぞや喜んでるだらうよ、もはや今日、貴様を箸にも棒にもかゝらない奴と思へばこそ、この上田力の鐵拳が此まゝ、膝の上にあるんだぞ、馬鹿野郎、少しやア恥を知れ恥を、罪を犯しても法網にかゝらない白癡瘋癲と一般、人間も友達に打たれたり蹴られたりするうちが多少まだ價值だ、ねエ吉田、はゝゝゝ、呆れの極、笑つて濟ますより外に殆ど對しようの無い奴だ」

諺にいふ地獄の釜の上を一足飛びの前途闇黒、いかな我武者の敵手にも唇を尖らして二の足を踏まぬ男ながら、不思議や儲この上田ばかりには汐入村以來の閉口、嚙んで吐き出さるゝ如く扱き卸されても、さのみ腹も立たねば膝を突つかくる勇氣も無く、まして多年浮世の落魄に苦勞死せし彼お島が事を言ひ出されては、石地藏の胸倉を取つて捻ぢ伏せるほどの奴も、ぐうの音も出ず、たゞ悄然と差俯いて無言の體、加之も沸くが如き熱情に血の氣の多い上田の天生、もはや呆れて笑ふの外、おのれに鐵拳を喰はすほどの價值なしといへど、その口の下より自然の情に溢れて、もしまた猶いまだ我を見捨てぬ友誼の鐵拳こゝに飛び來らば、さらぬも元來の大力に此面恰好が折曲るべしと、そろゝ薄氣味わるく面目なさに遁け出さんとする體を、上田じろりと横目に睨んで、ふツと思はず吹き出しぬ、



「早く歸れ、貴様の面を見ると何だか癩に觸つてならない、乃公のやうな人に過ぎた胃の腑の強い身體でも嘔吐を催しさうだ、第一近來、何を喰ひ込んだが、でぶ／＼と嫌に膏ぎツて丸く肥え太りやアがツた事、まだ汐入村の昔を忘れないで、あの貞女の隨いて居た頃ア、どツか五體の節々に緊縮があつて、をり／＼人間らしい匂ひもしたが、今日の黒田健次これ既に腐爛し切つて鼻持がならない、溝泥に浮の來た土左衛門だ、は、は、は、」

「や、何といはれても前世の約束と諦めて君だけにやア黙つて歸らう、しかし吉田、論語よみ洒落れたところあり肱まくら、といふ川柳を君、知ツてるかい、人は木彫の置物然として四角張ツた臺の上で生涯も送れないから、ちと丸く轉んで遊びに来るが宜いぜ、大俗は却つて大雅に通ずるの理だ」

「いや、いづれ其うち、また時機があつて、あの邊でも通ツた節に伺ひませう」

「は、は、念の入ツた御挨拶だな」

「おい／＼吉田、其奴に餘計な口をきくなよ、貴様また黙つて早く歸れ」

黒田健次、やう／＼座を立ちながら、おもはず口のうちに呟いていふ、

「人間萬事塞翁の馬の糞だ」

### 其三

東籬が下の隠君子に一時に生捕られて見世物となる團子阪の時節ならねば、まだ春の宵ながら千駄木の林町に往來の足音もなく、わけて女世帯の戸締り早く、内證ひツそりとせしランプの小影、はや十三の弟が白晝の草臥に踏み脱ぐ夜具を幾度か打かけつ、姉を相手に何をか語る母親の私語低聲、二階の六疊には吉田雄藏ありとも思へぬ静閑けさ、をり／＼の咳拂ひと書物のページを翻す音のみ聞えぬ、

「ねエ、おツ母さん、今日あの二階へ始めて入らッした黒田さんとかいふ方ね、あの方、やはり吉田さんと交情の善いお友達でせうか」  
 「をかした事をいふ子だね、交情の善いお友達かなんて、お友達だから、往來を通りがけに、ちらと二階の窓で吉田さんを見て其ま、這入ッて來なすッたンぢやアないかね」

「だッてあの方、嫌な人ですなエ」

「何故、何故、ほんとに和女は我儘で不可ないよ、どんな方か知りもしないで、一見さういふ事をいふから」

「何故ッて、あの方、いやだよ妾、あんな人は」

「これ和女、お春、女のくせに何といふ失禮な事を、いふんだね始めての方に」

「始めてでも何でも、あゝいふ人は大嫌ひ、妾が、お茶を持ッて二階へ上らうとする

と、あの人が夢中になッて妾の事を、變に、をかアしく、妙に吉田さんへ、吉田さんも大變、困ッて在らしッたワ、ほんとに嫌な、いけ好かない人、ですから妾、そツと其處へ置いたまゝ、遁けて降りたのも知らないで、まだ何だか餘計なお饒舌をして居た様子ですよ、始めて來てさへ、あれだもの、此後あゝいふ人が度々、來るやうになッたら、何をいふか知れやアしませんよ」

「おや、さうかへ、和女の事を吉田さんに、何か悪くでも」

「いゝえさ、おツ母さん、まだ悪くいへば、いはれただけで堪忍も出來ますが、まるで妾と吉田さんと、何故この頃は妙に、あんな、嫌な、見當違ひの岡焼ばかり來るンでせう、井出の奴といひ、今日の人といひ、そして歸りがけに、わざわざ妾の顔を、じいッと見てさ」

「お春、母の口から斯んな事を、いへる筈のもんで無いがね、これが外の人と違ッて

「あ、吉田さんだから和女、幸福だよ、どう見られたって自慢にこそなれ、決して此方の恥になる方ぢや無いもの」

「あら、おツ母さんまで」

「まったくだよ、女の子といふものは平生の心掛と其身の運次第で、どんな出世が出来ないにも限らないさ、しかし同じ出世と言っても、いろいろあつてね、よく世間でいふ一足飛びの玉の輿は結句、あまり結構過ぎて却って後日の爲にならないから、やはり身分相應で、今は兎も角、行末の見込ある立派な人を見立て、無理のない自然の運に出世するのが女の手柄といふもんだよ、それには二階の吉田さんこそ、實は願ったり叶ったりの方だよ和女、まア今時の下宿屋に轉々したり、また往來を肩で風きッて歩く書生さんなんかを御覽、ちよいと外觀の舉動風俗を見ただけでも和女、どこに吉田さんのやうな眞面目で氣立の優しい口數の妙い沈着いた靜肅な人

があるもんかね、それに和女も知ってる彼お常婆アさんが今の御主人で博士とか何とかいふ、大變な學者の家に在らしつたのを、どツか蒼蠅くない素人宿の二階を借りたのと事から、その世話で來なすつた時、萬事お常婆アさんに委しく聞いたが、お春、あの吉田さんはね、この東京で第一といふ法律の學校を卒業も卒業、これまでに無い立派な卒業をなすつて、今が今でも直に裁判所へ出れば判事とか検事とか、また外の事をしてても樂に立身の出來る方ださうだ、それを和女、猶更ら奥床しいぢやアないかね、少しの氣振にも出さず、まだくといふ御料簡で、あの通り夜晝、一所懸命に御勉強なさる程の方だもの、此後どこまで御出世なさるか知れないよ、その吉田さんが幸ひ、うちの二階に在らしつてさ、年頃の一人娘を持つた母の氣は、どんなだと思つてるの、口へこそ出さないが、それに和女うかくくと、まだ小兒のやうぢやア困るよ、と言つて外の方でないから、決して馴れ馴れしう、あまり心易

立に猥りがましうなッては却ッて輕蔑められるやうなもの、今年もう十七にもなれば、少しやア萬事に氣を配ッて、なるほど馬鹿でも無いと、思はれるやうにするのが母への孝行だよ」

たのむ樹下に雨漏りし心地、七八年前に良人を失うて、世間の交際さへせねば人知れぬ内證に其日を送るだけの物はありながら、冥加のために御仕立物いたし候といふ片手業の看板かけつゝ、女主人の獨身に後家を立通して、今年こゝに十七の娘を持ちし親心、頻りに聲を潜めて我を忘るゝ折しも、二階の降口よりランプの灯影ほつと射して吉田雄藏の聲、

「女主人、甚だ失禮ですがね、ちよいと上ッて來て下さらないか、實は此方から降りる筈ですが、わざと御免を蒙ッて勝手に言ひます」

如何な事ありとて、靜に音なく降り來りて必要の外は、おのが身勝手に物さへ言はぬ

人が、二階より其まゝ階下に對うての聲、おもはず眉を顰めながら、はいと答へて立ちかけし片膝、そつと振り返りつゝ、

「其お茶を入れてね、母の咳拂ひする時分に持つて來るんだよ」

花は昔の夢、春の色香は惜し氣もなく娘に譲りて、良人なき後家の寂びたる葉櫻ながら、やうく四十を越えしばかりの浮世馴れし體に、手軽く前掛の端を帶の片脇へ挿みつゝ、二階の一室へ入りぬ、

「何か御用で、おや貴君まだ御勉強して在らッしやいましたの、まア吉田さん、をりをりは早く氣樂に宵寢でも遊ばして、第一お身體を大切になさらないと貴君、いけませんよ、ちと考へて世間の怠惰書生を手本になさい、ほゝゝしかし御用は」

吉田雄藏、筆記の綴込を幾冊か机の上に擴けしまゝ、置ランプの影より靜に此方を振り向いて、雪の封じ目を解かれし梅花に等しく、おもはず微笑を浮べぬ、

「また女主人に叱られましたね、だが元來の愚物、よほど人に過ぎた骨折で勉強しきらないと、なかくととても通常の人間になれない奴ですよ」

「あら、うまく仰しやいますよ、もしこれが外の事なら吉田さん、貴君は安心の出来ない怖い方ですよ」

「は、ま、まるで悪人のやうに見られましたな、時に女主人、お忙しい中を、わざわざ呼び上げて、加之も唐突で甚だ濟みませんが、少々、急に、お談話のしたい事がありましてね」

「おや、何だか改つてで御坐います事、全體どういふ御用で、かう萬事お心易くして戴いた上は猶更、御遠慮なく打明けて」

「や、さう言はれると却つて困りますがね、實は女主人、折角いろくと御深切に今日まで段々お世話になりましたが、少し都合があつて、近々のうち、他へ引移らう

かと思つて居ます、無論、兄弟も同じ友達の家で、そら二三度こゝへ來て能く御承知でせう、あの身體の大きい、山のやうな上田といふ男の家です、ありやア家内と男の子が一人あつてね、本所の横網に小さな借屋住居して居ますが、やはり二階が空いてるから、といふ理由で」

きくや否、寢耳の大水に枕頭の珠玉を押し流さるゝ心地、はつと思はず進みかけし膝じつと心の底に引き止めながら、あくまで顔色に包めど、なほ何となく吉田雄藏の顔を怨めしげの眼色に打守りぬ、

「おや、さやうで御坐いますか、いえ御都合とあれば、いくら何と申し上げたところで、どんなに、お引き止め申したところで致方も無し、わけて物事に行届かない、御承知の通り不束な母子ですから、定めし、嘸お氣に召しますまいし、思召に叶ふ筈は御坐いませんが、しかし吉田さん、こゝまで貴君、どうか斯うか堪忍して下

すつたんですもの、いけない事は不可ないと、ひらつたく、母子の身のためになり  
ますやう、御叱責を載いて、ねエ貴君」

「いや、女主人、決して、どうして、なか／＼さういふ理由で、そんな事で、かう  
俄に出るンぢやア無いですよ、實は萬事、あまり深切に氣を付け過ぎて下さるから、  
最初の間は却つて居辛いくらるに思つて居たです、しかし其、居辛く思つたのも、  
おひ／＼横着に馴れて来て、は、／＼、づう／＼しくなつて来て、この頃ぢやア殆ど  
他人の家に厄介になつてるとは思はないほど無遠慮な我儘になりましたがね」

「吉田さん、其上は、もう承りませんよ、折角そこまで、假令お世辭でも、他人の  
家に居る氣はしないと、そこまで打解けて下さる以上、さう急に他へ、まるで遁け  
出すやうに在らつしやらなくつても、宜しいぢやア御坐いませんか、しかし是非、  
是非とも出ると仰しやれば、いづれ何か御不足のある筈、せめて母子の念晴しに

其、その御不足を今こゝで聞かして戴きたう御坐います」

「や、ますます困つた、こりやア困つた、こりやア困りましたな、どうも僕は、天性  
この口が無器用で、頗る世事の談話に下手だからね、わけて斯ういふ事には不得手  
だ、いや困つたわい」

「ほ、／＼、何も貴君、お困りなさる事は無いぢやア御坐いませんか、また貴君お口が  
上手の下手のツて、賣藥の口上では御坐いますまいし、そんな事で吉田さん、つま  
るところ外の事は儲置いて、全體、これが小癢に觸るとか、第一、こんな事が氣に  
入らないとか、それさへ承れば」

「女主人、こゝまで言ひ出して今更、甚だ變に何だか妙ですが、まア明朝あらためて、  
明日の朝、あらためて御相談する事にしませう」

「そりやア貴君、可哀さうで御坐いますよ、貴君ア明日でも宜しう御坐いませうが、

母子が今夜このまゝ、氣にかゝつて寢付かれませぬもの、また今夜こゝで仰しやるも明朝、承るも同じ事」

「さア其、同じ事がね女主人、困つたなア」

「おや、また困つて在らッしやいますの、よくく、母子に言ひ出し悪い不都合があると思えますねエ」

「や、さう言はれるよりやア、いッそ打明けて仕舞はう、お恥づかしいが女主人、實は吉田雄藏、頗る貧乏でね、さて今までは何とか工夫も算段もして來たが、いよく窮しましたよ、もはや鏝一文の出どころも無くなつて、月々お約束の物を拂へないのみか、此後どういふ御迷惑をかけるかも知れないから、今のうち、身の襤褸を出さないうち、一まづ無事に、こゝを引揚げたいと思つて、ところが僥倖、あの上田といふ骨肉に等しい者がね、勿論これも貧乏は貧乏ながら、どうせ足らぬ勝の世帯

へ一人ぐらゐる、といふやうな理由で、つまり當分、甚だ感心しないが食客に押し掛けるンですよ、はゝゝゝ昔の諺にも貧は諸道の妨害と、いひますからな」

「おや、おやく、どういふ難かしい理由かと存じましたに、おやまア吉田さん、さういふ事で貴君、只それだけの事で貴君、母子を目的の敵のやうにして、是非とも他へ往くと仰しやるンですか、ほゝゝゝ餘の事なら兎も角、さう承りましては猶更、どこまでも母子で、お引止め申しますよ、はい、なアに貴君、人にこそ依りけりで、貴君のやうな方が、わづかな金錢づくで、いえさ、失禮では御坐いますか、ほゝゝゝ吉田さん、あまり萬事お堅過ぎて、貴君より此方が困りますよ、これ、お春、ちよいと其お茶を入れてお出で」

天晴れ當意即妙と心得し一策の甲斐なく、びしやりと真正面の一叩きに叩き潰されて吉田雄藏ぐうの音も出ず、たゞ聲なき眼ばかり剥き出しつゝ、南無三寶の二の矢を射損

ぜし折しも、はや階下より敵の本尊が持ち運ぶ茶にさへ得ならぬ色香を含んで、母子無理に押並びし手前、いよく遁け損ねて生捕られたるが如し、

「お春や、これからは萬事よく氣を付けて、どうせ行届かないながらも、なるべく籠略のないやうにしないと不可ないよ、もし今までのやうな不都合では面白くないから急に引移つて外へ往らつしやるとさ、吉田さんが」

「おや、ほんたうで御坐いますか」

「ほんたうともさ、現に今それで、母が段々お謝をして、やツと御勘辨して戴いたところだよ、せめてねエ吉田さん、娘が母の半分も物事に氣を揉んでくれ、ば宜しいんですが、御覽の通り何分まだ貴君、手助けどころか世話ばかり焼けてね、そのくせ年だけは十七で、ほ、ほ、やはり父親の無い故で御坐いませうか、それ、それだから困るよ、何故うツかりしてるのさ、吉田さんのお茶が、もう冷めたぢやアな

いかね」

さらぬも眞甲に初太刀を浴びし吉田雄藏、ますく寸隙なく打込まれて、うけ流すへき手練なければ、身を翻して一方の血路も見出し得ず、たゞ惘然と敵の手に任しながら、おめく急所を刺さるゝに等しき體、なるほど、かゝる戦場には餘りに初陣過ぎたり、

されど恐ろしきは此初陣武者、太刀打こそ初心なれ、自己が一念かうと思ひ詰めし覺悟は戦場萬馬の古兵にも勝りて、動かざること磐石の如し、

#### 其四

人事一切これ黄金の點より割り出せば、路傍の瓦礫に似たる一個の無用物たり、人間萬事これ名聲の上より割り出せば、徒らに古昔の愚を守る地中の埋没物たり、されど



紛々たる世間の俗臭を打算し來りて夕顔棚の詩味一滴に如かずとすれば、正しく凡流の圏外に逸出せる自然の高尙幽玄に叶ひし境涯ながら、あと白雲の山に分け入る仙人の袂にも秋風そよと肌寒き浮世の恐ろしさを思へば、あはれ借屋住居に妻子を抱へて味噌醬油の通ひ路を踏み潰し得ぬ上田力その本人に取りては、やはり貧乏は好んでし  
たくなし、

されど幸ひ、寒中に着替の布子なくとも厨の壁は落つるとも、世の中に持つべきものは心ある眞實の友垣、一朝かの倉橋幸藏が羽翼を伸ばして海外へ飛び去るの際、得たる萬金を汐入村以來の同志に頒ちし其うちの一分こゝにあれば、功名富貴の反比例に生まれたる男も飢渴に迫らず朝夕を送りて、加之も連添ふ妻は不思議の縁ありて自己が口より常に濱町河岸の斑紋煮と罵りし例の下女お菊の方、もし山中ならば獵夫の鐵砲に覘はるゝほどの醜女ながら、心は此良人を護るがために天より下し賜へる如き美

質、まして生まれし男子は父母の容貌どちらにも似ず玉の如し、夜に入りて夫婦の間の一粒種、すやくと神の如く睡りし後は、わけて天真爛漫たる古風を帯びし質朴の良人に、うき世の苦勞を身の常として餘所を羨まぬ質素の妻、そもく金殿玉樓の夢にも知らぬ快樂この中にあり、

「おい、もう十二時を過ぎたらしいぜ、よせよ、どこの人間も寝る時刻だ」

「ですから良人、かまはず先へ御勝手に御就眠なさいよ」

「だがね、さう和女ばかり精を出してるに乃公が先へ、いくら何でも少々、氣の毒だ、聊か濟まないやうな氣がするよ、これといふ用もなくツて年が年中ぶらくしてる御亭主だからなア」

「ほゝゝ、妙なところで餘計な御遠慮なさる事ね、しかし今夜これを縫ッて置かないと困るんですよ、こりやア良人、翌日の朝すぐ坊に着せる襦袢ですもの」

「だから猶更、乃公が先へ寝ちやア濟まないよ、と言ッて力業で手傳へるもんぢやアなし、まア面白い談話でもして和女の氣を紛らさう」

「わざ／＼氣を紛らかされては却ッて手が後れますから、黙ッて寝て下さい、良人も坊も寝てる間が妾の休まる時ですよ」

「は／＼／＼なるべく起きて働いてくれといはれる筈の亭主殿が、一時も早く寝てくれ助かるといはれる理由だな、や、しかし奈何せん、事實に於て無理の無いところだ」

「おや、また理窟が始りましたね」

「おい、理窟ぢやア無いが堪忍しろ、連添ッた因果だ、せめて如斯ぐらゐの音は出さしてくれよ、憐れむべし苦學十年の曉、世間へ出て一言もない當世不向の馬鹿野郎に出来たんだ」

「何ですよう、つまらない、世間どころか家内に居てさへ物の言へない啞ですら、生涯大事な亭主にしてる女房があるぢやアありませんか、まして二十貫目もある立派な大きい身體を持ちながら、ほ／＼／＼をり／＼良人アそんな弱い音を吹くから無効ですよ、もし世間で饒舌るばかりが男子の能なら落語家の前坐でも濟みまさアね、馬鹿々々しい、少しやア例の黒田さんを見習ッて、あれまで横着になられても困りますが、さう自分で自分の氣を落さないやう平氣で在らッしやい、世の中は心の持ちよう一事ですよ」

「や、和女のやうに言ッてくれるから、これでも多少まだ亭主らしく見える時もあるのさ、なるほど、のんこの洒アで黒田の十分一も面の皮が厚けりやア、いくら乃公だッて、まさか件の如き社會の無用物にはなるまいよ、ねエ、は／＼／＼いや黒田といへば彼奴は全體どういふ頭腦の組織だらう、汐入村以來、相も變らぬ層雲飛び



もんだなア」

「なるほど、さう聞けば、さうかとも思ひますが、また良人のやうに黒田さんを買ひ過ぎてゐる人はありませんよ、勿論、足らぬ勝の世帯染みた女の眼では猶更ら酷く見えませうが、あの人が食客の時分を考へて御覽なさい、随分まア世の中に珍らしい御食客様でしたよ、ほゝゝゝしかし、あれほど浮世馴れた達者な辯を持つて居ながら妾を口で轉がすやうな世辭愛敬も無くツて、最初から終局まで地金の横着は横着で通し切つただけ却つて黒田さんの價値かも知れませぬ、また斯うはいふもんの良人に連添ふ妾ですもの、今更ら愚癡ッほく黒田さんに不足も何もありませんがね、あの吉田さんには、なるべく近づけない方が宜いでせう、時に吉田さん、何時から來なさいますの」

「實は今のところに少々、居れない理由があつてね、すぐ今日にでも來る筈だったが、團子阪の火事騒動で其家も道具を片付けたほどだから、明日か、遅くも明後日は必ず來るだらう」

「おや變ですね、どういふ理由があるんです、何か知りませんが吉田さんに限つて現在、今日まで居つた其家に居れなくなるやうな事は」

「はゝゝゝ無い筈が、あるからさ、つまりね、其家に妙齡の美しい娘が居つてよ」

「おやッ、あの吉田さんが、まア呆れました事、さうですか吉田さんが、こればかりは分らないもんですねエ」

「おいゝゝまだ何も、どうかう、いふんぢやア無いぞ」

「もう出來て仕舞つた理由では無いんですか」

「馬鹿ア言へ、をかしく出來て仕舞つてから仕やうがあるかい、いづれ降る空の曇りで身の濡れない傘の用意だ、折角あれまで眞面目に仕上げて來た吉田をして一朝の